

---

# 月夜のマーナ

田々中 七割

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月夜のマーナ

### 【Nコード】

N2908F

### 【作者名】

田々中 七割

### 【あらすじ】

「かゝいゝじゅゝゝゝ！」保育園からの帰り道、怪獣の形をした大きな木に、妹の美咲は毎晩のように怯えて泣いてしまう。なだめることを諦めた兄の良太は、ただ妹が泣きやむのを待っていた。そこに現れた、セーラー服の少女。彼女は、美咲に「あの木が恐いのか」とだけ聞くと、去ってしまう。こうして、良太の夏休みは、少女との奇妙な出会いから始まった。少年・良太が、謎の少女との関わりの中で成長する姿を描く、リリカル・ヒューマン・ファンタジー。

## 序章 約束のはじまり（前書き）

以前こちらで公開していた「怪獣の木」を、シリーズ化に向けて大幅に加筆したものです。



夏休みに入る。僕が家で美咲の子守をすれば、夜、この道を通ることもない。今日が、最後だ。

それにしても、

今日の美咲の暴れっぷりは、普通じゃない。

両手両足を、まるででたらめに振り回している。絶え間なく泣き叫び、良太の背中から落ちそうになる。危なくてしょうがない。

良太はいったん美咲を降ろした。美咲を立たせ、向かい合っせやがむ。

「かゝいゝじゅゝゝゝゝゝゝ！ かゝいゝじゅゝゝゝゝゝゝゝゝ！」

もう、何で泣いているんだか自分でもわからない。そういう状態じゃないかな。

子供は、長い間泣いていると、惰性で泣き続けてしまう事がある。自分が泣いていることが悲しくて、悲しいことが悲しくて、悲しいことが悲しいことが悲しくて、という、無限ループに陥ってしまう。そんなときの対策はただひとつ。

泣き疲れるまで、放っておくしかない。

この道は、建設業者がときどき材木置き場に使っている広い空き地と、林に挟まれている。空き地の奥の方は緩い斜面で少し高くなっている、病院の敷地に繋がっている。そこからは建て替えて使われなくなった古い病棟が見下ろしているだけで、民家は少し離れたところにしかないから、泣き声もそれほど迷惑でもないだろう。良太は、美咲の小さな右手を軽く握って、美咲が泣きやむのを待った。お母さんは、今日も遅いのかな。

父さんは、まあ、間違いなく遅いだろう。最後に会ったのはいつだったっけ？

良太は、働く両親を少しでも助けようと、美咲の子守を自分で引き受けた。とはいえ、学校まで連れて行くわけにはいかない。学校が終わり、宿題を済ませたら、晩ごはんの時間までに美咲を保育園から連れて帰る。その後は、他愛もない遊びにつきあったり、一緒にテレビを見たり、風呂に入ったりする。

模範的なお兄ちゃん。

いい子ぶるつもりはなかったけれど、結果的に良太は、両親からとても頼りにされるようになり、それが誇らしく、嬉しかった。

そんな思いにふけっていると、  
びた。

まさしくそんな表現の通り、美咲が泣きやんだ。

同時に、ふう、と花の香りが良太を包む。芳香剤のように嘘くさくない、生花のように命の鋭さを持っていない、柔らかく、暖かく、少し切なさを含んでいる、花の香り。

良太は、美咲の視線で、自分の後ろに誰かが立っていることを知った。

美咲の泣き声がうるさかったのかな？

良太はしゃがんだまま、恐る恐る、後ろを見た。

側面に大きな星がデザインされている、派手な色遣いの丸っこいスニーカー。

くるぶしまでの、短くて真っ白なソックス。

細いすねが、月明かりの中で透明に輝いている。

膝の上までの紺色のスカートが風になびく。

ああ、これはセーラー服だ。

上着の裾から、素肌が見える。

良太の視線はいったんそこで止まる。

その上に、穏やかなふくらみを持った胸。

良太の鼓動が、速くなる。

信じられないほど細い首。

少し尖った顎。

への字の口、小さな鼻。逆三角形の目。

への字？ 逆三角形？

良太は、息をのんだ。

べつに、逆三角形の目がどうこうというつもりはない。

良太は自分が、まあ、押さえた表現で言えば美少年ではないこと、正直に言えば少しだけ不細工な部類に入ること、薄々感じている。だから良太は、他人がどんな顔をしていようと、それをあざけるようなことはしなかった。ましてや、顔の部品の一つが逆三角形だろうと正五角形だろうと、気にはしない。

問題は、

その、逆三角形の目、への字の口と、それらが奏でる威圧感が、自分と、美咲に、向けられているということだった。

鬼か、般若か、悪魔。

出会ったことはないけれど、もし会ったら、きっとこんな感じなんだろう。

少女は目だけをぎろりと下に向け、良太を無言で睨んでいる。理屈ではなくて、良太の体の中に残っている生物としての記憶が、その両足をかくかくと震えさせる。美咲はすでにぺたんと座り込んでしまい、良太は膝をついてなんとか体を支えている。

少女の体はどちらかというと華奢だけれど、良太の視界を覆いくすほど大きく見えた。立っているだけで、ずずずずず、と地響きが聞こえそうだ。

良太は、その存在感に圧倒され、身動き一つできなくなった。

「じっ」

良太は、喉をふるわせ、

「じっ」

このまま踏みつぶされるのではないかという恐怖に駆られながら、

「じっ」

自分と、美咲を守らなければならないという使命を、

「じっ」

果たそうとして必死に、

「ごめんなさい…っ」

と謝った。

セーラー服の少女は、何も言わずに立っている。

良太も、それ以上何も言えない。  
沈黙を破ったのは、美咲だった。

「う」

まずい。良太は瞬時に危機を感じた。

美咲はいま、恐怖の無限ループに陥ってしまった。

怪獣が怖い。お姉さんが怖い。

怪獣とお姉さんが怖い。

怪獣とお姉さんが怖い事が怖い。

怪獣とお姉さんが怖い事が怖い事が怖い。

怖い怖い怖い。怖い怖い怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

「うー…」

「みつ、美咲！ 大丈夫だから、な？」

無駄だと思いつつ、良太は必死でなだめようとする。

しかし、美咲を恐怖の無限ループから救ったのは、意外なことに  
(恐怖の一因である) セーラー服の少女だった。

「美咲」

少女は、逆三角形の目によく似合う低い声で、美咲に話しかけた。

「あれが、怖いのか？」

自分の視線で、怪獣の木に、美咲の視線を誘導する。

良太には、少女が、自分が恐怖の対象になっていることに気づいていないのか、根本の恐怖だけを見いだそうとしているのか、判断できなかった。

ともあれ、美咲の頭脳は、まだ複数の事象を同時に処理できるほど発達していない。

質問されたことで、美咲は恐怖の思考を止め、無限ループから抜け出た。

「…うん」

「そうか」

そう言ったきり、少女は黙ってしまった。



怖がらなくてもいいとなだめてくれるのか、手品のように怪獣の木を消してくれるのか。良太と美咲は、少女を黙って見つめた。しかし、少女は二つの視線を気にせず、逆三角形の目を少し細めて怪獣の木をじっと見つめ、もう一度、「そうか」と言っただけで去ってしまった。

良太は、美咲が怪獣のことを思い出さないうちに、美咲を背負って走って家に帰った。

家に着くと、母が珍しく早く帰ってきていた。

母は、晚ごはんの温かい香りと共に、エプロンで手を拭きながら二人を出迎えた。

「お母さん」

美咲は大急ぎで靴を脱ぐと、母にしがみついた。

良太は軽い嫉妬を感じながら、放り出された美咲の靴を揃える。

無口な母は、「おかえり」の代わりに、とびきりの笑顔を二人に向けた。

良太と美咲が手を洗っているうちに、食卓には、すでに茶碗が並べられていた。

レンジが嫌いな母は、弱火でことごと温めていた魚の煮物を器によそう。

魚が嫌いな美咲は、「ゲー」と言いながら椅子に座る。

良太は美咲の頭をポンと叩いて「好き嫌い言っちゃだめだよ」とたしなめる。

いつもの、いつもの、夕食の風景。

父が仕事で帰ってこないのは寂しいけれど、三人で囲む食卓にはもう慣れてしまった。

三人で「いただきます」と声を揃えたあと、良太は柔らかく味のしみた魚をほぐしながら、そういえば、と軽い気持ちで話し出した。「今日ね、変な人に会ったんだ」

「え」

母の顔が一瞬こわばった。しまった、と良太は慌てて言葉を足した。

「中学生くらいのお姉さんなんだけど」

緊張を解く母の顔を見て、良太も安堵する。

「怪獣の木のところで美咲が泣いてたら、いつのまにか僕の後ろに立ってて」

「怪獣の木？」

「ほら、病院の近くの広い空き地。奥の方に、怪獣みたいに見える木があるんだ。あれが恐いかった」

そんなのあったかしら、と、母は顎に人差し指を当てた。

「美咲が恐いって答えたら、そうか、って言って帰っちゃった。なんだったんだろ」

「小さい女の子が泣いてたから、心配になって来てみたんでしょ」

良太は納得できなかったけれど、「きょうね、保育園でねー」という美咲の一言で、その話は終わってしまった。

美咲のとりとめのない話を、母は黙って聞いている。

ときどき大げさに驚いたり、話の続きを聞き出したり。

お母さんは、無口だけど、聞き上手だよな。

美咲は、話だけではなく、今日教えてもらった歌を歌ったりもした。けれどそれは、音程やリズムがどこにも見あたらず、何の歌か、そもそも歌なのかどうかすら怪しい。

このくらいの年の子なら、当たり前まえのことなのかもしれないけれど…。

美咲は兄のひいき目かもしれないけどかわいいし、素直でいい子だと思う。

ただ、この、歌の下手さだけが、心配だ。

良太は妹の将来を案じながら、少し冷めた味噌汁をすすった。

それにしても、やっぱり、変な人だったよな。

美咲の世話を母に任せ、良太は久しぶりに静かな風呂を楽しんでいた。

良太は、可愛らしく丸っこいスニーカーと、逆三角形の目を交互に思い出し、なるべくその二つの間にある、

上着の裾から見えたすべすべの肌と、

その少し上にある、やわらかいふくらみは、

思い出さないように努力した。

もっとも、良太にとってそれは無駄な努力で、どうやっても妄想が広がってしまう。

「なんだったんだろう」

妄想を断ち切るために、良太は口に出してそう言った。

「美咲が泣いてたから来たのかな？ でも、あんな人、この辺じゃ見たことないしなあ。それに、」

少し身をかがめ、口を水中に沈める。

「恐いかって、そんなことを聞いてどうするっていうんだ」

良太は、ざぶ、といったん湯船に潜ってから、風呂を出た。

「お兄ちゃん」

とてとてとて、と美咲が駆け寄ってくる。かわいいな、と良太はそれを抱きとめる。

友達は、妹なんて生意気なだけだって言うけど。美咲は、うん、かわいい。

「お兄ちゃん、明日も、迎えに来てくれるの？」

「うん、夕方まで、待っててね」

そうだ、あと二日。そうすれば、夏休みだ。

終業式の日、学校が終わったらそのまま美咲を迎えに行こう。そうして一緒に帰ってきて、夜まで一緒に遊んであげよう。それから、そうだ。

「美咲、こんど、遊園地に行こうか？」

「ゆうえんち…？ 遊園地！」

遊園地というのは、駅前からバスで二十分ほどの所にある、市営の小さな遊園地のことだ。簡単な乗り物があったり、ウサギなどの小動物に触れられるので、小学校低学年くらいまでの子供たちには人気があった。

良太自身は、もうそんな遊園地は卒業したけれど、

美咲と一緒に、きつと楽しい。

「お兄ちゃん、やくそく！」

良太は、美咲が差し出した小指に自分の小指を絡め、心の底からの笑顔を浮かべた。

## 第1章 少女（1）

### 第1章 少女（1）

蝉の声が、ふいに止んだ。

夕日はすでに家々の屋根の向こうに沈んだけれど、空はまだ明るく、熱い空気はじつとりと良太にまとわりついている。

道ばたの草が一度だけ、かざりと揺れる。けれど、目に見えない何かに咎められたかのように、それきり黙り込んでしまった。

美咲は良太の背中から肩越しに前を見ている。良太が足を止めると、自分の汗がしたたり落ちる音さえ聞こえそうな静寂に包まれた。二人の行く先を遮るように立っているのは、セーラー服の少女。逆三角形の目は見る者すべてを射抜きそうな殺気にも似た眼光を放ち、への字の口は聞く者すべてを絶望の暗闇にたたき落とす遠雷のような声を轟かせる。

昨日の人だ。

良太は、この人が母の言っていたように美咲の泣き声を心配して来たのではないことを確信した。

僕らを、待ち伏せしていた。

この人とは関わらない方がいい。けれどこの道を通れなければ家に帰れない。良太は身動きがとれなくなった。

引き返して遠回りする？ いや、美咲を連れていてはすぐに追いつかれてしまう。僕が囹になって、美咲だけでも先に？ いや、美咲が一人で走って帰れるとは思えない。

良太は、短い時間でいくつかの逃げ道を考えた。けれど、少女はその逃げ道を、たった一言ですべて潰してしまった。

「高橋美咲」

ばく、と良太の心臓が飛び跳ねる。「個人情報」が漏れたら怖いの

よ」と母が言っていたことを思い出す。

「ど、どうして名字を…？」

そんなことはどうでもいい、とばかりに少女は良太を無視した。

「高橋美咲、聞きたいことがある」

美咲は良太の肩にしがみつく。石になろうとでもしているように堅く目を閉じて、小さく震えている。

「ちよっ」

良太は、自分の口からまるで自分の物とは思えないくらいいうわずった声が出てきたことに驚いた。

「ちよっと待つてよ、あの…、お姉さんは…、」

お姉さんは誰なの？ というよりも、何なの？と訊いた方がいいような気がする。

けれど少女は、良太が迷いに答えを出す時間を与えず、

「お前には関係ない。わたしは美咲に聞いている」

と良太を睨みつけた。ひ、と良太は後ずさる。

関係ないと言われても、簡単には引き下がれない。美咲を、守らなきゃ。

「かかか、関係なくないよ、なんで待ち伏せなんかしてたんだよ」

「美咲、何に怯えている？ あの木の何がそんなに怖い？」

「どうして僕たちの名字を知ってるの？ どうやって調べたんだよ」

「あれはただの木だ、お前を襲ったりしない。それでも怖いかな？」

「答えてよ！ ねえ、答えてよ！」

「美咲、何が怖い！ 答えろ！」

良太は少女を、少女は美咲を、それぞれ一方的に問いつめる。二人の声がだんだん大きくなり、とうとう美咲が、泣き出してしまった。

良太は口を尖らせて無言の抗議をしたけれど、少女は受け入れず、泣き続ける美咲を黙って睨んでいる。

「それで、お姉さんは何なんですか？ どうして、僕たちの名字を知ってるんですか？」

少女は答えない。

「美咲はまだ小さいんだから、木が怪獣に見えるっただけで泣いちゃうこともあるよ」

少女の小刻みな顔きは、納得しているわけではないけれど否定はしない、という意味だ。良太は、自分が言った言葉を確認するように、怪獣の木を見た。

「…昨日は満月だったな」

独り言のような少女のつぶやきに誘われて、良太は木の上のほうを見る。

普段は、月の形のことなんて理科の授業の時にしか考えたことがなかった。たまたま夜空を見上げたときに満月だったことが何度かあるけれど、それはお月様に呼ばれたのだと思う。

ゆうべは、そうだ、

怪獣の木は満月に照らされて、

僕でさえ生きているのではないかと思ってしまっくらい、  
活き活きと輝いていた。

月に特別な力があるはずない、だろうか？

もしも誰かが月の不思議を説いたなら、

僕はきつと何度も頷いてしまう。

それが、満月に限ってということなら、なおさら。

「…満月だと、何なの？」

良太の質問には、期待が込められている。けれど少女は何も答えず、ゆっくりと視線を良太に向ける。

その目に宿った光が、良太を震えさせる。正面から見ると、やっぱり怖い。

逆三角形の目だけを見ると怖いだけだけれど、それとへの字の口

が組み合わせると、逆らうことが許されないような威圧感を感じる。良太はまた一步後ずさる。また家が一步遠くなる。

このままじゃ、家に帰れない…。

良太は半円を描くように、距離を保ったままゆっくりと少女の周りを回って少しずつ家の方に近づいた。

少女の目は、正確に良太を追ってくる。

やっと、良太と少女の位置が入れ替わった。あとは、タイミングを見計らって走り出し、全力で逃げる。しかし、

「わたしは、」

少女の低い声に絡め取られ、走り出そうとしていた良太の足が硬直する。

「美咲に聞かなければならないことがある」

まっすぐに睨みつけられ、良太は口を開くことさえできない。一歩ずつ、倒れそうになる体を支えるように下がる。

極度の緊張で聞こえなかったのか、それとも美咲の鳴き声で聞こえなかったのか。いつの間にか、蝉の声が良太の四方を取り囲んでいることに、初めて気づいた。音の圧力は次第に高まり、頭が割れてしまうのではないかと思うくらいにじいじいじいと響く。

逃げる、逃げる、逃げる！

良太はすべてをふりほどき、美咲を背負ったまま走り出した。

振り返るとすぐそこに少女がいるような錯覚に怯えながら、それでも転んで美咲に怪我をさせないように確実に足を振り出して走った。

ついてきている、あのお姉さんがついてきている。

それが錯覚であることを願いながら、道が緩く曲がっている手前で良太は、

立ち止まり、振り返った。

そこに少女はいなかった。さっきの場所から一步も動かず、おそらくは怪獣の木をじっと見ていた。



ほ、と良太が安堵の溜め息をつく、まるでそれが聞こえたかのように、少女が良太を睨みつけた。

良太は情けない悲鳴を上げながら、家まで走って逃げた。それが情けない悲鳴だった、と気づいたのは、その夜、布団に入ってからだった。

終業式が終わると、良太は走って保育園に向かった。

ああもう、先生の話が長くて、遅くなってしまった。

車に気をつけるように。川には近づかないように。暗くなる前に家に帰るように。宿題は毎日やるように。家の手伝いをするように。病気をしないように。悪いことをしないように。テレビを見過ぎないように。冷たいものを食べ過ぎないように。エアコンに当たりすぎないように。友達と遊ぶように。ゲームばかりしないように。登校日を忘れないように。歯を磨くように。毎日風呂に入るように。わかってる。わかってることばかりだ。そんなことより、早く保育園に行かなくちゃ。

良太は、友達がさっそくいくつかの言いつけを破るべく、誰かの家に集まって、エアコンの効いた部屋でアイスでも食べながらゲームをしようと誘ってきたけれど、断った。

早く美咲を迎えに行かなくちゃ。

良太が保育園に着くと、先生が出迎えてくれた。

「良太くん、こんにちわ」

「こんにちわ。あの、美咲は」

挨拶もそこそこに、美咲の姿を探す。

そんな良太を、いいお兄ちゃんね、と先生は柔らかく見つめる。

「みんな、今お昼寝中なのよ。起こしちゃかわいそうだから、ね？」

良太は、保育園の職員室に誘われて、冷たい麦茶を飲みながら待つことになった。

すっかり顔なじみになった三人の先生に囲まれて、良太は照れていた。

「…いえ、そんなことないです」

「偉いわよう、毎日毎日迎えに来るなんて」

「うちの子なんて、良太くんより三つも年上なのに全然ダメ」

「妹さん思いなのよねえ、美咲ちゃんも幸せねえ」

良太は真っ赤になって俯いてしまった。

ほめられるのは嬉しい。それが、父さんやお母さん以外の人からなら、なおさらだ。でも、こんなふうに取り囲まれてさんざんほめられるのは、さすがに恥ずかしい。

なんとか話題を逸らしたいのだけれど、共通の話題といえば美咲のことや家のことだし、それを話せば話すほど、良太はほめられてしまう。良太はさすがに逃げ出したくなった。

「あの…、ちよつと」

そんな良太を救ったのは、職員室に入ってきた若い先生だった。助かった。この先生は恩人だ。

「高橋：さん？」

「え、あ、はい」

滅多にさん付けの名字で呼ばれることのなかった良太は、少し緊張した。この先生にはあまり面識がない。なじみの先生は、良太くん、と呼んでくれるのに。

「あの、高橋さんに、お客さん…なんですけど…」

僕にお客さん？

たまたま保育園に来ている僕に？

良太は首を傾げながら、先生に促されて入ってくる人を見た。それは、

逆三角形の目をした少女。

ぎゃ、と良太は叫んだ。

良太は、保育園の職員室で、少女と向かい合って座ることになった

てしまった。

こういうの、なんて言うんだっけ。一難去ってまた一難、だっけ。先生たちにほめられてたほうが、まだ良かった。

うつむいた良太の視線は、自然に少女の足下に引き寄せられた。昨日と同じ、丸っこくてかわいいスニーカー。この靴と逆三角形の目が繋がっているということが、どうしても信じられない。

「あの…、僕に用って」

良太は、うつむいたまま切り出した。少女の表情が恐ろしくて、とても顔を合わせることなんてできない。もつとも、下を向いていても、頭をぐいぐいと押さえつけられているような圧迫感を感じている。

「お前にじゃない」

良太には、少女の声が遠雷のように聞こえた。なんて低く、迫力のある声だろう。さっきまで、先生たちのきやらきやらころころという笑い声に包まれていたのが嘘のようだ。そんなことよりも、

僕にじゃ、ない？

「じゃ、あの…」

「美咲に会いに来た。そうしたら昼寝中だといわれた」

追い返してくれりゃいいのに。良太は、さっきは恩人だと思えた若い先生を憎んだ。当の先生たちは、二人の邪魔をしないように遠くから、しかし保育士として最小限の警戒心を持ち、意識だけをこちらに向けていた。

だめじゃない、中学生でも、部外者は部外者なんだから。わかってます、わかってるんですけど、その、どうしても逆らえなくて。

少女を招き入れてしまった先生は、怒られているようだ。当然だろう。最近はある事件が多い。良太だっていつも防犯ブザーを持っているし、特に美咲を保育園から連れて帰るときには注意

するように言われている。一度だけ父が美咲を迎えに行っただけ、身分証がないとダメって言われたよ」と一人で帰ってきたこともあった。それくらい厳しいのに。

「美咲に、何の用なんですか？」

少女のスニーカーを見つめたまま、良太はやや警戒気味に答えた。膝の上に置いた拳に、おもわず力がこもる。

「例の、」

そう言いながら、少女は少し大きさに足を組んだ。

良太の視線は、無意識にスニーカーを追って上に移動した。スカートの少し奥が見えそうになって、良太は慌てて下を向く。

少女は良太の慌てぶりをほんの一時楽しんでから、続けた。

「例の、美咲が怖がっていた木のことだが」

「だから、怪獣の形が…って、それよりも、」

この人は、いったい、何なのだろう？

どうしてわざわざ、美咲に会いに保育園まで来たんだろう？

どうして美咲がこの保育園にいとわかったんだろう？

良太は、何から聞いていいのかわからなかったけれど、

とりあえず目の前の疑問から片づけることにした。

「それよりも、そのヘルメットは…？」

安全＋第一。

少女が膝の上に置いている、そう書かれた黄色いヘルメットを指さし、良太は恐る恐る尋ねた。

「これか？ 工事現場とかで、見たことないか？」

「ありますけど…」

「見たとおりの物だ」

良太は、はあ、とだけ答えた。それ以上の答えは期待できず、それ以上の質問は許されないと悟ったからだった。

「美咲は、いつごろからあの木を怖がるようになった？」

「…お姉さんには関係ないでしょう」

そっちが質問に答えてくれないなら、こっちだって答えてやるも

んか。良太は、せいっぱいの強気で少女の目を睨みつけた。

少女には、良太の意図が正確に伝わった。少女は、軽く咳払いをしてからヘルメットを持ち上げ、ゆっくりと、重大な事実を告げるかのように、

「これは頭部を保護するための物だ」

と告げ、今度はお前が答える番だとばかりに口を結ぶ。

良太には、少女の意図が正確に伝わった。けれど、

これで今度は僕の番だったのは、不公平な気がする…。

と、もつともな感想を抱き、こちらも固く口を結んだ。

少女は、良太に答える気がないとわかると、机に置いてあった麦茶を取り、ぐいぐいぐい、と飲み干した。

良太は、脈動する細いのどに見とれてしまった。

目を閉じてさえいれば、

この少女の、なんて綺麗なことだろう。

コップが離れる瞬間のくちびるの、

なんて柔らかく眩しいことだろう。

少女はコップを机に戻すと、机の上の写真立てを手に取った。五人の園児たちが輪になって見上げている姿を、真上から撮る構図。

子供からの信頼と憧れを、大人がまっすぐに受け止めている。大人から溢れこぼれる愛情を、子供たちがいっばいに開いた手のひらで掴もうとしている。子供の視点に合わせるだけが愛情ではない、と先輩保育士が残っていた写真だった。

「いつもお前が迎えに来るのか？」

少女は、写真を見つめたまま言った。

「父さんは夜遅いし、お母さんも働いてるから。お母さんが帰ってくるまで待つてたら、美咲がかわいそうだし」

答えてから良太は、しまった、と後悔した。家の事情を外で話してはいけないといつも言われていたのに。特に、家が夜まで空っぽ

だなんて、こんな得体の知れない人には絶対に言っちゃいけないことだった。良太は慌てて言い足した。

「別に、お母さんもそれほど遅いつてわけじゃないんだけど、晩ごはんのしたくとか、いろいろあるから。そうだ、洗濯も帰ってからするんだ。だから…」

少女は慌てる良太に特に関心を持つふうでもなく「そうか」とつぶやいて、写真を戻した。

そのまま、自分の失敗を責めている良太を横目で見ながら立ち上がると、先生たちに「おじゃましました」と告げて、職員室から出ていってしまった。

「良太くん、今の方は…？」

「え…、あ、近所の…、お姉さんです。たまに美咲と遊んでくれて、嘘をつくことに、あまり抵抗はなかった。そう答えるのが、いちばん簡単だった。」

「ふーん？ 無愛想だけど、綺麗な子ねえ」

「はあ…」

良太は、また先生たちに囲まれたけれど、話は半分も聞いていなかった。

彼女は誰だ？ 彼女は何だ？

どうして美咲に。どうしてこの保育園に。

どうしてヘルメットを。いや、それはこのさい放っておこう。

また美咲に会いに来るだろうか。来るだろう。

怪獣の木が、

どうしたっていうんだ？

「それでね、ケンちゃんがね」

「うん」

「お砂場でね、シャベルね、なくしちゃったの」

「うん」

「それでね、みんなだね、探してあげたの」

「うん」

「…お兄ちゃん、おてて、痛い」

「うん」

良太は、知らない間に美咲の手を強く握っていることに気づいた。

「ああ、ごめんごめん」

保育園からの帰り道、良太と美咲は、いつものように手をつないで歩いていた。

僕が、美咲を、守らなきゃ。

良太は、傾いた美咲の帽子を直してやった。

夏の日差しは、容赦がない。お母さんが子供の頃は、真っ黒になつて遊べなんて言つてたらしいけど、今はなるべく紫外線を浴びないようにつて言われてる。

「美咲、知らない人について行っちゃだめだよ」

「わかつてるよう」

「お菓子あげるつて言われても？」

「ついていかなーい」

「絶対ダメだよ？」

「お兄ちゃん、うるさい」

美咲は、良太の手を振り払って駆けだした。  
がん。

今日、学校の先生にさんざん分かり切ったことを注意されて嫌な思いをしたのに、同じ事を美咲にしてみました。

お兄ちゃん、うるさい。

良太はショックで足下がおぼつかなかったけれど、美咲を追って走り出した。

もちろん、多少ふらついていても、幼児の足に追いつけないわけがない。けれど、そんなこととは関係なく、

美咲は、立ち止まっていた。

怪獣の木の見える、少し手前で。

怖がるのは夜だけかと思ったけど、これは思ったより重傷だな。

「美咲？ 大丈夫だよ、行こう」

美咲は、ふてくされたように口をとがらせている。

よし、と良太は、美咲に背を向けてしゃがんだ。

「ほら、おんぶ」

「うん」

美咲は、美咲にとっては大きい背中に、よじ登った。

「よっし、いっくぞーっ！」

良太は、美咲を背負ったまま、全力で走り出した。

美咲は、きやあきやあとはしゃぎながら、良太の首にしがみつく。美咲の腕は熱いけれど、それがとても心地よい。良太は風を切って、美咲が怪獣の木に気づく暇を与えずに走り抜けた。

「到着！」

結局家まで走ってきた良太は、玄関の前でやっと美咲を降ろした。

「とうちゃーく！」

美咲も、意味がわかっていいのかいないのか、両手を上げて叫んだ。

汗だくになった良太は、家に入るとすぐに風呂を沸かした。

これは、先月になって、やっと母から許可されたことだ。良太の家の風呂は沸かすのに少し手間がかかる旧式のものだったので、良太がいじってはいけないことになっていた。

しかし、母が帰るまで風呂を待っていては美咲がかわいそうだからと、母の目の前で風呂を沸かしてみせる「認定試験」を受けて合格し、それ以来、それは良太の役目になった。

良太と美咲は、風呂が沸くまで戸棚にあったおやつを食べて待った。

冷蔵庫にあった麦茶に砂糖を入れると、美咲は一気に飲んでしま



った。もう一杯、もう一杯とせがむ美咲に、本当にもう一杯だけだからね、と麦茶を渡す。

我ながら甘いなあ、と反省するけれど、美咲にせがまれて断る術を、良太は持っていなかった。

いいんだ。しつ前は親に任せる。僕の役目は、美咲が退屈しないように面倒を見ることと、危ない目に遭わないように守ってやることなんだから。

危ない目。

美咲が遭うかもしれない危ない目って、なんだろう。

交通事故？

誘拐？

あの、鬼のような顔をしたお姉さんは、美咲に何をするつもりだろう。

良太を、大きな不安が襲った。

自分に向けられたものではない、やいば。

その切っ先にいる、大切な、妹。

僕には、美咲を守ることができんだろうか？

いや、守るんだ。守らなきゃ。

良太は、美咲の頭に手を乗せて、大切な妹をじつと見つめた。

「お兄ちゃん？」

コップから口を離して、首をかしげる美咲。

良太は、不安を隠して笑顔を作る。この半年くらいで、ずいぶん作り笑顔がうまくなった。

「そろそろ沸いたよ。お風呂入ろう」

「うん！」

とりあえず、家にいれば、何も不安はない。

良太にとって、家は堅強な城も同然だった。鍵をかければ、あの般若のようなお姉さんも入ってこられない。ここにいれば、大丈夫だ。

その日、母は遅くまで帰ってこなかった。

良太は、今日保育園で起こったことは言わなかった。言えば、母によけいな心配をさせてしまうから。

母のことを思っただけの内緒だったけれど、なぜだか、良太の胸はちくりと痛んだ。

## 第1章 少女(2)

### 第1章 少女(2)

夏休み初日の朝。

良太が薄目を開けると、蝉の声がじいじいと響いていた。今年は蝉の当たり年だ、とテレビで言っていた。何年かに一度、蝉が大発生することがあるそうだ。

台所からは美咲の下手な鼻歌が聞こえる。リズムは絶えず変わり、音程にも規則性がなく、つまりはでたらめなのだけれど、良太にとっては聞き慣れたものだから特にどうとも思わない。

たつぷりと汗がしみこんだTシャツを着替えながら台所に向かうと、朝食が用意されたテーブルには、母のメモがおいてあった。

涼しいうちに宿題を済ませること。

わかってるけど、難しいんだよな。良太は苦笑いをしながら、メモを丸めて捨てた。

「美咲、おはよ」

「おはよー」

美咲は、クレヨンでチラシの裏に絵を描いていた。そう言えば昨日、裏が白いチラシが何枚か新聞に折り込んであって、美咲が「大漁だ!」とはしゃいでいたっけ。

チラシには、テーブルにはみ出しそうなくらい大きく、縦長の茶色い楕円形のものが一つ。

「何、書いてんの?」

「かいじゅう」

あれほど毎晩のように怪獣に怯えて泣いているのに、どうして怪獣の絵なんか描くんだろう。

「怪獣、怖くない?」

「いいかいじゅうだもん」

ふうん、と良太は曖昧な返事をして切り上げる。

美咲のことはかわいいと思うけれど、どうしても理解できない部分だって、ある。

美咲は、絵を描いている間はおとなしい。妙な鼻歌は聞こえてくるけれど、それは決して耳障りじゃない。今のうちに、宿題を済ませてしまおう。

良太は自分の机から宿題の山を取り出し、でたらめにその中の一冊を抜き出した。

算数。

良太はがつくりと肩を落とし、それでも他の教科を選び直そうとはしなかった。どうせ、どれを選んでも同じように肩を落とすから。それでも、今日の良太には、算数は都合の良い教科だった。

一問答えては美咲を想い、一問答えては恐ろしい顔をした少女に震え、一問答えては怪獣の木の謎を想像し、一問答えては暑さに閉口する。いろいろ考えてしまっただけで集中できないから、時間を細切れにできる算数がちょうどいい。

蝉の声は、ますます賑やかになる。

良太と同じ年くらいの少年の声が聞こえてくる。

角の家の犬が、それに応えるように吠える。

三十分もしないうちに、良太は鉛筆を放り投げた。もちろん暑さのせいもあるけれど、あまりにもいろいろな考えることがあって、宿題がはかどらない。

美咲は相変わらず絵を描いている。

怪獣は三体に増えているように見える。みんな「いいかいじゅう」なのだろう、美咲はご機嫌でクレヨンを走らせている。

良太は、ごろ、と床に寝ころんだ。天井を見つめて、考えをまとめてみようとする。

怪獣の木、がある。

美咲がそれを怖がる。

逆三角形の目をしたお姉さんが現れて、「木が怖いか」と聞く。

翌日、美咲の保育園にそのお姉さんが現れる。

それから、

それだけだ。

そこから先は、何を考えても、すべては、あのお姉さんが何者なのか、というところで行き止まりになってしまう。

確かめる必要がある。

美咲を守るために。

兄として？

兄として。

あのお姉さんが何者で、美咲に近づいて何をしようとしているのか。

セーラー服に騙されちゃいけない。かわいいスニーカーに騙されちゃいけない。

保育園を突き止めてくるなんて普通じゃない。

そのうち、この家にも来

「どーん！」

ごぶつ。

「み、美咲…、どーんってしちゃダメって…言っただろ？」

美咲はまだ軽いけれど、さすがに不意打ちで腹の上に乗られると、一瞬息ができなくなる。

「たいくつー！」

馬乗りになり、不満顔で両腕を振り回す美咲。

仕草のひとつひとつが、かわいくて仕方ない。

良太は美咲の脇を支え、持ち上げた。そのまま立ち上がり、くるくる回って美咲を振り回す。

それだけで美咲の機嫌は直り、一転してはしゃぎ出す。一瞬ごとに表情を変える美咲は、良太にとってもいいおもちゃだった。美咲

と遊んでいるあいだ、良太は不安を忘れることができた。

「美咲……？」

昼ごはんの後、眠ってしまった美咲のほほを、軽くたたいてみる。起きないことを確認すると、良太は、帽子を深くかぶりなおした。扇風機は回してある。小窓を開けてあるから、風は通る。ガスの元栓も閉めて、三回も指さし確認した。もしもの時に、押すだけで母に電話が通じるボタンは、美咲も使える。

もつとも、そんなに家を空けるつもりはない。ちよつと怪獣の木のところまで行って、その木の周りに何か秘密がないか探して、何か見つかったら、あるいは何も見つからなくても、すぐに帰ってくる。

あのお姉さんに、捕まったりしなければ。

良太はそつと美咲から離れた。唇だけを動かし、行ってきます、と言が残す。

外に出ると、頂点を過ぎたばかりの太陽が、良太を突き刺した。

それでも、多少風があるからだいぶ楽だ。

最初の角を曲がる。右側が畑、左側が住宅地。朝早くには、このあたりで採りたてのトマトを売っている。

小さな酒屋がある。この道は車が少ないけれど、酒屋の角だけは見通しが悪いから注意すること。

その先に、分かれ道。右は駅に続く道、左は、林と、

いくつかの民家の塀に挟まれた道。やがて塀がとぎれて空き地がひろがり、その奥に、

怪獣の木が立っている。

強い日差しの下でも、その木は決して威厳を失わず、どつしりとそこにいる。風にぎろりと眼をめぐらし、近づく者を威圧する。時に強風が渦巻けば、大口を開いてごうごうと吠える。

幼児には怖い姿。けど、僕には、ただの木だ。

緊張しているのは、木が怖いからじゃない。

お姉さんが怖いんだ。

どっちにしる恐がりだ、と良太は自分を情けなく思いながらも、美咲のために、と自分を奮い立たせ、空き地に踏み入った。

あの木に、どんな秘密があるんだろう。何か埋まってるのかな。人とか。

木のところに、何かいたりして。

幽霊とか。

良太は、考えれば考えるほど怖くなりそうだったので、早足で木に向かった。

近づいて見上げるようになると、怪獣の姿はくずれ、普通の木になっってしまう。良太は勢いを増し、木に突進する。

とうとう木の根本までやって来ると、良太は恐る恐る幹に触れた。ほら見る。何もない。何もない。怖がることなんか、何もないんだ。

木の幹に触るなんて、久しぶりだな。

それは、決して気温が高いせいだけでなく、温かく感じられた。気づけば、茂った葉に護られた木陰は、そよと吹く風だけを良太に与えてくれている。

良太は、木に背をもたれ、足を投げ出して座った。温かくて、涼しくて、心地よい。

遠くから聞こえる蝉の声、もつと遠くから飛行機の音。

木陰に漏れる光の点が、風に揺られてくるくと踊る。

こんなのもいいな。ここにこうして座って、

美咲に絵本を読んであげて、

美咲が飽きて眠ったら、僕は読書感想文を書く本を読もう。  
宿題だって、ここで本を読むなら辛くない。

良太は帽子のつばをぐいと下げて、目を閉じた。

怪獣の木だなんて、バカバカしい。

こんなに気持ちいいのに。

良太はすっかり緊張を解き、心地よさに身を委ねた。

「おい」

頭上から聞こえた声に、良太は硬直した。恐る恐る見上げると、  
いや、見上げなくてもわかつている。

木の上に、逆三角形の目の少女がいた。五メートルほど上、太め  
の枝に、安全＋第一の黄色いヘルメットをかぶって立っている。

「なっ、ななななな」

腰が抜ける、というのを、良太は生まれて初めて体験した。  
逃げたい、立てない、動けない。

良太は、かろうじて動く右手人差し指を少女に向けた。

「ななななな、なんで、そんな所に」

「調査だ」

少女はさらりと答える。

「ちょ、調査？」

「そんなことより」

少女の目が、ぎん、と細くなる。ひ、と良太がのけぞる。

「お前、向こうを向け」

「えっ、な、なんで？」

背中を向けたら食われる。間違いない。食われる。間違いない。  
どうしよう。逃げよう。どうやって。動けない。

少女は、すっかりパニックに陥っている良太に、ため息をついた。  
スカートをつまみ、軽くひらつかせ、



「下から覗くな、と言ってるんだ」

「え？」

良太は、少女の意外な言葉を受けて、パニックは収まったけれど、代わりに、頭が真っ白になった。

「え？ 下から？ なに？」

そして少女は、とどめを刺すべく、もう一度スカートを振った。今度は、少し大きく。

良太の心臓が、弾けた。

「ぐっ！」

慌てて後ろを向き、頭を抱える。

「ごめんなさいいいっ！」

少女は、良太が下を向いたことを確かめると、ひらりと飛び降りた。

「よっ」

「え？」

まさか飛び降りるとは思っていなかった良太は、思わず振り返り、上を見た。

良太の目に、それはスローモーションのように映った。

五メートルの高さから、なんのためらいもなく飛び降りる少女。

両手で押さえているけれど、風圧でめくれ上がるスカート。

とす、と意外なほど静かな着地。

着地するやいなや、目を座らせた少女は、両手を腰に当て、良太に言った。

「見るなと言っただろう。お前、意外と……」

「そっ、そんなじゃないです！ ごめんなさい！」

「まあいい」

え、いいの？

少女は、拍子抜けする良太の横に立ち、ヘルメットを脱いで、木を見上げる。

「いい木だな」

「え？ あ、はい」

「茂り方がいい」

「はあ」

「幹も太いし」

「ですな」

「スカートも覗ける」

「はい。え、あ、いや、それは」

「美咲は、」

不意打ちに、どくん、と良太の心臓が縮む。

「美咲は、どうしてこんなにいい木を怖がるんだと思う？」

どうしてって。

決まってるじゃないか。怪獣の形が、恐いんだ。

けれど、良太は答えない。

少女も、答えを待たずに続ける。

「何かが見えているのか、見えなくても感じているのか」

「何かって…幽霊みたいなもの、ですか？」

少女は、ちらりと良太を見た。

「かもな。それを、調査していた」

なんなんだこの人。なんなんだ。

小さい子が泣いてて、この木を怖がってるから、幽霊がいなか

どうか調べてる？

何のために？

夏休みの、自由研究かな。中学生でも、自由研究ってやるのかな。

宿題。

そつだ、宿題しなくちゃ。

算数、途中で放り出して、

美咲！

そつだ、すっかり忘れていた。美咲を家に置いてきたままだった。あれからのくらい経った？ こんなに暑いのに。一人きりにして。帰らなきゃ！

良太は走り出した。

「あ、おい！」

少女の声は、届かなかった。

「ただいまっ！ 美咲っ！」

家に飛び込んだ良太を迎えたのは、涙でぐちゃぐちゃになった美咲を膝に抱いた母だった。目を覚ました美咲が、母を呼ぼうと緊急ボタンを押したらしい。

「良太……」

無口な母は、言葉少なに良太を責めた。最後まで言われなくても良太には母の叱責が伝わる。

「ごめんなさい……、友達のとこに行つて……。美咲、ごめんな」

美咲は、母の膝に顔をうずめてしまった。

「お兄ちゃん、きらい。きらい。きらい」

くぐもった声で、何度も繰り返す。

仕方がない。

僕は、美咲を護るために、出かけていった。

仕方がない。

あの木のところで、居眠りをして、お姉さんに会って、帰りが遅くなってしまった。

仕方がない。

目が覚めたら、兄がいなかった。心細くなって母を呼んだ。

仕方がない。

だから僕は、お母さんに叱られた。

仕方がない。

だから僕は、

美咲に、

嫌われた。

仕方がない。

「美咲…、ごめんな」

良太は、ぼそと言い残して、自分の部屋にこもってしまった。

「お兄ちゃん、きらい」

容赦のない美咲の声が、その背中に刺さった。

結局、母はそのまま職場へは戻らず、美咲を連れて夕飯の買い出しに行った。

僕は、ダメだ。

あの木のことは何もわからず、

お姉さんのことも何もわからず、

中途半端に放り出して逃げてきた。

帰ってきたら、

これもまた中途半端に放り出しておいた妹に嫌われた。

僕は、中途半端だ。

子供なのに、妹を守ろうとか。

子供なのに、お母さんを心配させないようとか。

幼い妹にちよつと頼りにされてるからって、いい気になって。

保育園の先生たちにちよつとほめられたからって、いい気になつて。

結局、僕は、

何もしてないじゃないか。

良太は、壁際で膝を抱えたまま、窓から見える空を見ていた。

夏の空は、夕方になってもまだ、ぎらぎらと白く明るい。

ゆっくりと陽の力を弱めては行くけれど、

昼の間にため込んだアスファルトの熱気と蝉の声が、

少しずつ太陽と入れ替わるように、あたりに満ちてくる。

いつの間にか、蝉の声に混じって、台所から包丁の音が聞こえてきている。

いつもなら、母に構ってもらえない美咲が良太の所に来るけれど、

今日はもちろん、そんなことはなかった。

美咲のためを思って出かけたのに。

良太は、理不尽に拗ねている自分がますます嫌になる。ずっと我慢していた涙がにじみ出てきたころ、母が部屋の戸を開けた。

母は、黙って良太の頭に手を置く。

反省している息子を、さらに追い込む母ではない。

良太は、黙って頷き立ち上がる。

許してくれた母に、いつまでも拗ねた顔を見せる息子ではない。食卓では、美咲が一人で待っていた。大好きなコロツケを、泣きそうな顔で見つめている。

良太は美咲に声をかけることが出来ず、小さく「いただきます」とつぶやいた。

翌朝、良太は母に起こされて目を覚ました。

「みーちゃん、今日は保育園に預けるから」

良太の頭に置かれた手から、母の怒りは伝わってこなかった。美咲がそれを望んだのだろう。その証拠に、美咲はまだ良太の顔を見ようとしなない。

意外と執念深いんだな。

「良太は、宿題もあるだろうし。ね」

母親の気遣いが嬉しく、情けなく、恥ずかしい。

やっぱり僕は、お母さんを気遣っているつもりになっていただけだ。

妹の面倒も、ろくに見られないくせに。

「お母さん、帰りは？」

「昨日早く帰っちゃったから…。お迎えに行ってくれる？」

「うん、わかった」

それまでに、機嫌直してくれてればいいけど。

…勝手だな。機嫌直して、って、僕が悪いんじゃないか。

良太はそれでも、美咲に笑顔で手を振り、いつてらっしゃいと見送った。

美咲は、また、泣きそうな顔をしていた。

静かになった家の中で、良太は一人、朝ごはんを食べた。

トーストにマーガリンを塗るときのカリカリという音、

牛乳が喉を通るときの音、

静かな部屋の中で、良太はその音の大きさに、今さら気づいた。

一人なんだな、と思い知らされる。のろのろと朝食を終えると、良太は家を出た。あてはないけれど、ひと気のない家は寂しくてしかたがない。

良太は、とぼとぼと歩きながら考えた。

これから、どうしたらいいんだろう。

美咲と、元通り仲良くするには。

美咲に、頼りにされる兄になるには。

母に、頼りにされる息子になるには。

決まってる。あの木のこと、あのお姉さんのことを明らかにする。それしかない。

良太は、怪獣の木に向かった。

怪獣の木がある広い空き地の前に立つと、良太はあたりを見回した。

また、突然声をかけられるかもしれない。昨日は、みっともなくたじろいってしまった。

でも、

今度は、

負けない。

正面から立ち向かって、聞き出してやるんだ。

あの木のことを。美咲に会って、何をするつもりなのかを。

一歩進むたびに、ジャリが音を立てる。その都度、良太の گرفتった神経が、ぴり、と響く。

良太は木を見つめる。その葉の隙間から逆三角形の目が覗いていないか。

木の根本まで来ると、良太はいるのかどうか分からない相手に声をかけた。

「お姉さん、いますか」

お姉さん、という呼び方はどうかと思う。

いますか、という問いかけもどうかと思う。

これから、対決、しようとしている相手に。

けれど、名前は知らないし、年上だし。

いずれにしろ、少女はいないようだった。

良太は神経をとがらせたまま、木の根本にあぐらをかいて座った。

ここはやっぱり気持ちいいな。

陽は遮られ、風は通り、適度な木漏れ日のゆらぎは見ていて飽きない。

良太は、少女を、待った。

## 第1章 少女(3)

### 第1章 少女(3)

木陰の心地よさに、不覚にもうとうとしていると。  
じゃり、という音がして、良太は目を覚ました。

来た？

良太は顔を上げた。

その視線の先に、少女がいた。

今度は驚かない。今度は負けない。そう誓っていた良太だったけれど、

思わず、ぽかんと口を開けてしまった。

セーラー服に、黄色い安全+第一のヘルメット。これは昨日と同じ。

逆三角形の目に不似合いなスニーカー。いつも通り。

しかし今日は、

右肩に担いだ頑丈そうな三脚と、左手に提げた大きなバッグ。

何を、する、つもりなんだろう？

あつけにとられている良太に気づくと、少女はいったん立ち止まったが、構わずに歩き始めた。

良太は座ったまま、少女を睨む。少女は良太と視線を合わせたまま、ずんずん進む。

とうとう、メートルの至近距離で、二人は向かい合った。

良太は少女を睨み続けている。少女は何も言わない。

少女はバッグを降ろした。どさ、と重そうな音がした。肩に三脚を担いだまま、バッグのファスナーを開け、直径二十センチほどの円盤状の巻き尺を取り出す。

巻き尺の先端を口でくわえて少し引き出すと、その先端を良太に突き出した。



良太は、わけがわからないながらも、その先端をつかむ。それを確認すると、少女は巻き尺をのびしながら木から離れていった。

なんで、ごく自然に手伝わされてるんだ。

「しっかり持つてる」

少女がまるで叱るように言う。その言葉には圧力があり、逆らえない。

少女は二十メートルほど離れると、そこに三脚を立て、巻き尺を巻き取った。

三脚に乘せられた望遠鏡のような物で、木を見上げる。

さすがに、良太は訊かずにはいられなかった。

「あの」

少女はノートに何かを書き込みながら答えた。

「何だ」

「何して…るん…ですか？」

敬語を使うことに多少抵抗はあるけれど、ため口にはもつと抵抗があった。

「木の高さを測っている」

良太は、今度も驚いた。まさか、ちゃんと答えてくれるなんて思わなかった。

「距離と角度がわかれば、木の高さがわかる。学校で習わなかったか」

「習った…かも」

「十二メートル三十センチ、と」

少女は良太の質問に答えてくれたけれど、それで何かがわかったわけでもない。

「木の高さを測って、それで、どうするんですか？」

今度は、少女は答えない。

ほら、これだ。

都合の悪いことには答えない。意地悪だ。

しかし、少女の胸の内は、良太の考えていることとは少し違って

いた。少女は少し間をおいて、ためらいがちに、答えた。

「…まだ、わからない。ひよっとしたら、何もしないかもしれない」  
良太には、理由はわからないけれど、少女の行動の鍵になるものが見えてきた。

「美咲、ですか？」

少女は黙ってうなずく。良太は、やつぱり、と齒がみをする。

「美咲には会わせません。お姉さんみたいな、その、怖い、あの、顔の、ええと」

だんだんしどろもどろになってしまふ。さすがに、本人に向かって「お姉さんみたいな怖い顔の人」とは言いにくい。

良太の言いたいことは伝わったはずだけれど、少女は気にも止めず、黙々と作業を続けていた。木から空き地の端までの距離や、木の枝の広がり幅を測っている。

どうも事態が進展しない。良太にはいろいろ聞きたいことがあるけれど、なかなか聞き出せない。たとえ聞きたいことを箇条書きにして読み上げてでも答えてくれないだろうと思えたし、だからといって相手にうまく答えさせるような話術を、良太は持っていない。

どうしよう、どうしたら。

良太が困り果てていると、少女が手を止めて口を開いた。

「恐いか」

「え？」

「わたしが恐いか」

何を今さら。悪魔と般若の中間みたいな目つきで「恐いか」なんて、ええと、愚問、だ。かといって、「怖い」と答えるのもシヤクだし。

「美咲が、怖がってるんです」

我ながら、うまい回答だ。

「スニーカーは、かわいいとは思わないか」

「そりゃ、まあ」

「セーラー服も、かわいいだろう」

「服は、まあ」

「パンツも、かわいかっただろう」

「確かに。…え、あ、いや、そんな」

良太は慌てて取り消そうとしたが、そんなことは気にも留めず、少女は作業を続けている。

けれど少女は、少し肩を落としているように見えた。

そのまましばらく作業を続けていたけれど、

「今日はもう、終わりだ」

突然そう言い出して、後かたづけを始めた。巻き尺や水平器、望遠鏡のような物、ボタンがたくさんある機械。どこかどかと、バツグに詰め込む。

それが終わると、三脚を肩に担ぎ、良太に言った。

「それ、よろしく」

良太は、少女があごで指した先に視線を移し、そこに大きなバッグを見つけると、当然の事だけれど、

「え？」

と聞き返した。

「よろしくって、何？」

「何って…、わたしがそんな大きい荷物を持てるわけないだろう。女の子だぞ？」

来るときは自分で持ってきたじゃないか、という良太の反論は、最後まで聞いてもらえなかった。少女は良太の肩にバッグをかける、黄色いヘルメットを脱いで良太にかぶせた。見た目はプラスチックだが、思ったよりも重い。そして、

ふわ、と花が香る。

初めてこの少女に出会ったときと、同じ香り。温かくて、柔らかくて、ちよつと切なくて。

良太が、ぼう、としている間に、少女は歩き始めてしまった。良太は慌てて後を追う。そんな義理はないのだけれど、完全に主導権は少女にあった。

「ちょっと、待ってよ」

もちろん少女は、待たなかった。

重い荷物を抱えてよろよろと追いつがる良太を、少女は振り返ることもしず、歩き続けた。

良太の全身から、汗が噴き出る。影を作るものもなく、日射しは良太に直接襲いかかる。それは焼くような気持ちのいい暑さではなくて、蒸すような苦しい暑さを良太にもたらした。

「どこまで歩くんだよう、ちょっと休ませてよ」

とうとう良太が弱音を吐くと、少女はジュースの自販機の前で立ち止まった。

良太はその場でへたり込み、うずくまる。がこん、とジュースが落ちる音がする。

お小遣い持ってくればよかったな。

良太が恨めしそうな顔を上げると、そこに少女がいた。炭酸飲料の缶を差し出している。

あつけにとられている良太に、少女は缶を押しつけた。

「手伝わせているんだからな。これくらいのはする」

良太は、恐る恐る缶を受け取る。缶の冷たさと、結露の潤いが良太を生き返らせた。

「あ…、ありがとう」

「うん」

しかし、良太が缶を開けようと指をかけたとき。

「ただし、」

思わず良太の手が止まる。

「その缶、思いっきり振ってある」

「え？」

良太は缶を眺めた。間違いない、炭酸飲料だ。じゃ、どうして振ったりしたんだろう？ 飲めないじゃないか。

良太の気持ちを看透かすように、少女は言う。

「目の前にジュースがあるのに飲めない。悔しいだろう」

「そりゃ悔しいよ。なんでこんなことするんだよ」

少女は、良太の隣にしゃがみ込む。

「わたしも、悔しい」

「はあ？」

わけがわからないことをいう少女に良太がとまどっていると、少女は良太からジュースの缶をもぎ取り、フタを開けた。わ、と良太がよけようとしたけれど、ジュースは吹き出さなかった。

少女はジュースをひと口飲むと、何事もなかったように良太に返した。そして、もう一度つぶやく。

「わたしも、悔しい」

良太は、極めて平静なふりをして、飲み口に口を付けた。内心は、口から飛び出た心臓がそのままぴょんぴょんと跳ねていつてしまいうようなほどだったけれど。

良太がジュースを飲み干すのを待って、少女は立ち上がった。

「もう少しだ。行くぞ」

「あ、うん」

ジュースをもらったからというわけではなくて。一本のジュースを分け合ったからというわけではなくて。

良太には、だんだん、この少女を避ける理由がなくなってきた気がしていた。

今日はすべてを明らかにするくらいのつもりで来ていたんだし、こうなったら最後までつきあってやろうじゃないか。意気込んでみたけれど、どちらにしろ、このバッグを運び終えるまでは自分が解放されないであろう事は、よくわかっていた。

少し細い道に入ると、りっぱな生け垣に囲われた、古くて大きい民家がいくつか並んでいる。その先には小さな神社があるけれど、夏の昼間だからという理由だけではなくて、人の気配は全くなかった。

この道は、確か、川に続いている道だ。

神社の横を抜けると、田んぼが広がっていた。田んぼに挟まれた道を三百メートルほど行くと土手がある。さすがに土手を登るときは、少女がバッグを運ぶのを手伝ってくれた。

県境の大きな川は、もちろん川遊びをするような場所ではない。大きな土手の向こうに広い河川敷があるだけで。犬の散歩で来る人は多いようだったけれど、良太には縁のない場所だった。

だから、良太がここまで来るのは久しぶりだった。来たところで特に何があるわけでもないし、何より普段から川に近づいてはいけないと、学校の先生や母に言いつけられていた。けれど、久しぶりに登った土手からの眺めは、

なんて、きれいなんだろう。

左手の上流には金色の空、

右手の下流には紺色の空。

川の流れに沿って水面を見渡せば、

いつ色が変わったのか気づかないくらいに滑らかな、

金から紺へのグラデーション。

対岸の土手を走る人と、

その足下に添う犬のシルエット。

「何もないから」と近寄らなかつた景色は、  
なんて、きれいなんだろう。

良太が景色に見とれているから遠慮したのか、少女は少し小さな声で、

「あそこだ」

と、土手の下、少し先の茂みを指さした。そのそばに、小さなテントがぽつんと置いてある。

「あそこって…あのテント？」

「そう」

「あそこに住んでるの？」

少女は少しむくれたような顔をした。

「住んでるわけじゃない。一時的に、寝泊まりしているだけだ」

つまり、住んでるんじゃないか。

良太は少女を追って、テントに向かった。

キャンプ場でもないところに建っているテントというのは、不気味で、近寄りがたい。まともでない人物が住み着いている可能性が高い。良太は心の中で、「この場合も当てはまる」とつぶやいた。テントには生活臭はない。キャンプのような華やかさもなく、ただ夜露をしのぐだけという感じだった。

良太はテントのわきにバッグを置いた。体が浮くように軽く感じられた。

さて。

どうやって、きりだそう。

ここまで来たからには、根掘り葉掘り、全部聞き出してやる。なぜ怪獣の木を調査しているのか、なぜ美咲に会いたがっているのか、なぜこの町に来たのか、なぜテントで暮らしているのか、

聞くことが多すぎる。けれどまずは、

「お姉さん、名前聞いてもいい……？」

カップ麺のゴミをそそくさとテントの陰に隠そうとしていた少女は、手をぴたと止めてゆっくりと振り向いた。

「……わたしの、名前か？」

少女は、わかりきっているくせに、なぜかもったいぶるように聞き返す。良太は不自然な緊張感に包まれる。

そして少女は、ゆっくりと、口を開いた。

「わたしの名は……タンゲバル」

良太はぎょつとして、タンゲバルと名乗る少女を凝視した。

なるほど、威圧感のある逆三角形の目には、タンゲバルという名がよく似合っている。

彼女の口から低く轟いた、およそ人間らしくない、悪魔のような

名前。どこの国の人だろうか？ いや、それ以前に、

そうだ、この人は、

人間、なんだろうか？

おののく良太に、少女は続ける。

「…何を考えているか、だいたいわかるが」

「え？」

「丹頂鶴の『丹』に『下』、原っぱの『原』と書いて、たんげばる、と読む。日本人だ」

良太は、手のひらに「丹下原」と書いてみた。

「め…珍しい名字、だね」

「下の名前は麻奈菜という。発音しにくいから、たいていマーナと呼ばれるがな。どうだ、かわいいだろう」

逆三角形の目の上辺が、わずかに弧を描いた。笑ったのかもしれない。

少女がとりあえずは人間らしいことを知った良太は、少し安心した。

「それで…えと、タンゲバルさん、」

その名で呼んでいいものかどうか、上目遣いでマーナを見る。

「その呼び方はやめてくれ。かわいくない」

「あ、うん。じゃ、ええと…まなな、マーナさん、」

マーナは微かに満足げに頷く。

「美咲に用って、何なの？」

「あの、怪獣の木、だけどな。美咲は、本当にあの形を怖がっているのかな」

「そりゃ、怪獣、怪獣って泣いてるんだし。…あ」  
けれど、

昨日、美咲は、怪獣の絵を描いて遊んでいたじゃないか。いいかいじゅうだからこわくない、と。

「わたしはな、」

良太の表情に答えを見つけたように、マーナは言う。



「美咲は、わたしやお前には見えないものを見ているんじゃないか、と思うんだ」

「見えないもの？」

「わたしにも見えないし、見た記憶もないが…、確かに、子供にしか見えないものはある、らしい」

何を言ってるんだろう？　子供にしか見えない物？　だって、

「僕だって、子供だよ」

「そうか？　妹の面倒を見て、母親を気遣える男を、わたしは子供だとは思わない」

マーナの言葉には、まるでそれが当たり前であるかのように、ためらいがない。ためらいがないからこそ、その言葉は良太をうつむかせた。

「駄目だよ。僕はお母さんが優しいからって、甘えてるだけなんだ」  
マーナは良太をじつと見ていたけれど、誰も、自分さえ気づかないくらいに微かにかぶりを振り、自分の心の中にある言葉をたぐり寄せるように、言った。

「一人で生きることができかどうか、ではない。人と共に生きられるかどうかだ」

良太は、何も答えられない。人と共に生きられるかどうか。その答えを出すのは、良太には、難しすぎる。

「…何かあったのか？」

好奇心やお節介ではない。マーナは、本気で良太を、良太と妹の仲を心配している。それがわかったから、良太は、

何も言えなかった。自分で解決しなければならぬこと、それを知っていたから。だから良太は、

「…なんでもない」

とだけ、答えた。

「僕、もう行かなくちゃ。美咲、迎えに行かなくちゃ」  
敵に慰められ、心配されるほど惨めなことはない。

良太は逃げるように帰ろうとしたけれど、立ち止まった。一つだ

け、どうしても聞いておきたいことがあった。

「マーナさんは、美咲に何が見えるか、それを知ってどうするの？」

良太の質問から逃げるように、マーナは川の上流を見た。

すでに陽は、彼方の街並みに沈んで行こうとしている。

マーナの視線を追おうとして、良太は眩しさに目を細める。

沈む夕陽、逆光に妖しく輝くマーナの姿。

良太は、その姿に引き寄せられるように、マーナの横に立つ。見上げる彼女の横顔が、夕陽に照らされている。

きれいだな。

良太が人の姿をきれいだと感じたのは、これが初めてだった。何も考える事ができず、ただ見つめてしまう。不思議なくらい鼓動が早くなっている事にさえ、良太は気づかなかった。

さらさらの髪が、夕日に照らされて金色に透き通っている。

何を見つめているのだろう、まるでその心がそうであるように、まっすぐに揺るがない瞳。

柔らかかそうなくちびるが、何かを言いたげに薄く開いて。  
え。

気がつくと、マーナは良太の顔を見下ろしていた。

「人の顔をじろじろ見るもんじゃない」

「ごっ、ごめんなさい」

「美咲に、会わせてくれ。一度でいい。危険はないし、それに……」  
マーナは言い淀んだ。

「それに？」

「それに、これは、人助け、なんだ」

自分を納得させるように、言い聞かせるように。そして、なんだから悲しそくに。

「頼む。美咲に、」

良太はマーナの言葉を待たず、そして、

答えを出さずに、走り出した。

結局、何もわからなかった。それどころか、謎が増えた。

人助け？ どうして？ 何が？ 本当に人助けなら、どうして悲しそうに言っただろう？

わかったのは、あのお姉さんの名前 たんげばる、だっけ。丹下原マーナ。

何のヒントにもならない。

良太は、息を切らして走った。

マーナから、逃げるように。

マーナの横顔を、思い出さないように。

けれど良太は、

なかなか、夕日に照らされたマーナの横顔を忘れることができなかった。

「ぜんぶ良太に押しつけるつもりじゃないの」

無口なはずの母は、正座をさせた良太の前で同じように正座をして、長々と説教を続けていた。

結局、良太が保育園に着いたのは、日も暮れて、母が美咲を連れて帰っていた後だった。

台所から味噌汁のいい香りが漂ってくるけれど、幸せな気分はひとかけらも感じられなかった。

「お友達と遊びたいときには遊んでいいし、」

良太は、ただ黙って下を向くしかなかった。

「夏休みの宿題だってあるだろうし、」

美咲は、離れたところから見ている。まだむくれているようだった。無理もない、迎えに来るはずの兄が、いつまで経っても来なかったんだから。きっと、今日良太が迎えに来てくれたら仲直りしていつもどおり手をつないで一緒に家に帰るつもりだったのだろう。

「用事があるならそう言ってくれればいいの。でも、みーちゃんを迎えに行くって、約束したでしょう？」

ああ、お母さんに叱られているところなんて、美咲に見られたく

なかったな。

でも、仕方がない。

あのお姉さん　マーナさんのところに行っていて、美咲を迎えに行かなかった僕が悪いんだから。

叱られるのは当たり前だ。美咲が怒っているのも、当たり前だ。

「良太？　聞いているの？」

「あ、はい。…ごめんなさい」

「みーちゃん、保育園ですつと待ってたんだからね」

いつもはこんなになちなちと怒ったりはしないのに。どうして今日は、正座までさせて。

情けない。僕は、情けない。叱られて、情けない。妹に見られて、情けない。

良太の目に、涙が浮かんできた。僕はやっぱり、駄目な子だ。約束を守れない、妹の世話をすることもできない、マーナさんに慰められて、心配されて、

お母さんに、叱られて。

そのとき、

美咲が良太に駆け寄ってきた。良太をかばうように、良太に飛びつく。

「お母さんダメ！　いじめないで！　お兄ちゃんかわいそう！」

「え、ちよつと、みーちゃん？」

母は美咲に、少し強く言う。

「みーちゃん、お兄ちゃんはね、約束を破ったの。みーちゃんを迎えに行くって言うてたのに、行かなかったのよ？」

「いいの！　みーちゃん、せんせいと遊んでたから、いいの！」

「じゃあ、もうお兄ちゃんを叱らなくていいのね？」

何度も頷く美咲を見つめて、母は口元を緩ませた。

「じゃ、晩ごはんにしましょう。すぐ支度するから待っててね、お兄ちゃん」

お兄ちゃん、とわざとらしく呼ばれたことで、良太にはすべてわ

かった。

お母さんは僕を叱っていたんじゃない、意地になっていた美咲の心を、少し素直にさせるために、あんな芝居を。

やっぱり、僕は子供だな。でも、

良太は、さすがしく笑う。そうだ、

一人で生きることができかどうか、ではない。人と共に生きられるかどうかだ。

「美咲、ありがとな。助かったよ」

美咲は、正座している良太の膝に覆い被さるように抱きついたまま、かぶりを振った。

「お兄ちゃん、かわいそうだったもん。お母さん、おっかなかった」

「そうだね、お母さん、おっかなかったね」

「おっかなかった！」

「うん、おっかなかった！」

すっかり仲直りした兄妹は、大きな敵に立ち向かった自分たちを褒め称えるように、小躍りしてはしゃいだ。

母は、その様子に苦笑しながら、揚げ上がったコロッケを皿に盛った。

二晩続けてコロッケというのは、料理好きな母にとってはつまらない。けれど、

ゆづべのコロッケは、きっと、しょっぱかったから。

「さあ、ごはんにしましょう」

母のいつも通りの呼び声に、兄妹はいつも通り食卓についた。

「そうだ、」

三箇目のコロッケに手を出しながら、良太は美咲との約束を思い出した。

「美咲、明日、遊園地に行こうか。お母さん、いいでしょ？」

駅前からバスで二十分ほどの所にある市営の遊園地は、美咲にとってはこれ以上ないくらいに楽しいところだ。美咲は、良太に連れ

て行ってもらう約束を忘れていたこともあって、大はしゃぎした。  
「気をつけてね」

すっかり仲直りした二人に、母は静かに微笑む。

明日は、夏休みに入って初めて、楽しい日になりそうだ。

## 第2章 系（1）

### 第2章 系（1）

翌朝、良太と美咲は、分かれ道の前に立っていた。

遊園地に行くなら、駅のある右の道へ。そのことは美咲も知っているから、そこで立ち止まった良太に不思議そうな目を向ける。

「お兄ちゃん、はやく行こうよ」

「う、うん……」

良太は、美咲に引かれて駅へと歩き出した。

マーナさんは、今日もあの木のところに来るだろうか。

来るだろう。彼女はそのためこの町にいるんだだろうから。

マーナさんは、今日も美咲を待っているだろうか。

待っているだろう。彼女は、美咲に会わせてほしいと言った。

僕は、美咲を、マーナさんには会わせない。

それは、正しいんだろうか。

マーナさんは、人助けだと言った。

僕はそれを、

人助けを邪魔しているんだろうか。

ひょっとして僕は、悪いことをしているんだろうか。

マーナさんが助けようとしている誰かを、見捨てようとしているんだろうか。

良太は、はしゃぎながら先に行く美咲を見つめる。

美咲にしか見えないもの、

美咲にしか助けられない人、

もしそれが本当にあるのなら、

僕は、どうするべきなんだろう。

いくら考えても、答えは出てこない。答えを出すための材料が、

少なすぎるから。答えが出ないなら、  
そうだ、今日は楽しもう。美咲と、遊園地で、夕方まで。

快速電車が通り過ぎるこの駅には、あまり利用者はいない。駅前には大げさなロータリーがあるけれど、これは奥まった場所にある駅舎の前までバスが来て、ぐるっと回って戻って行くためのものだ。あとはたまに出迎いの車が暇そうに止まっているくらいで、この駅前には活気というものが感じられない。

良太の父は「この落ち着いた感じがいい」とこの街を選んだそうだけれど、引越してきた後で、数年後には大きな道路が良太の家のすぐそばを通ることになると知ってがっかりしていた。道路ができれば生活が便利になる、と学校で教わっていた良太には、父の気持ちはわからなかった。

良太と美咲は、バス停から離れて駅舎の壁に寄りかかっていた。バス停には屋根がなく、日差しの強い日や雨の日にはたいいていの人がこうしてバスを待っている。

良太は、交差点の向こうのコンビニ、バスが顔を出すあたりをじっと見て待った。

やがて来るはずのものを待つ　。  
そのじれったさをマーナの気持ちに置き換えそうになって、慌てて頭を振る。

今日は、決めたんだ。一日楽しく、美咲と遊ぶって。

「まだー？」

美咲がＴシャツの裾を引っ張る。良太は駅の時計を見て、遅いね、と答えた。「この駅の時計は少し遅れていて、たまに騙されるのよ」と母が言っていたことを思い出した。

「あっ」

だんだん飽きてきた美咲の気を引こうと、突然良太は叫んだ。  
「来る…、来るぞ。バスが来るぞ」



「どこ？ どこ？」

「まだ見えないね。でも…」

良太は、真剣な顔つきでコンビニをまっすぐ指さした。

当然、本当にバスが来たことがわかったわけではない。けれど、

良太は少しでも時間を稼いで美咲を飽きさせないように、

「もうすぐだ…。十、九、八、七…」

美咲は目をまん丸にして、良太とバスが来る方向を交互に見ている。良太は笑いをこらえながら、

「六、五、四、三…」

これでちょうどバスが来てくれたらすごいんだけどな。そんなにうまくは行かないだろう。

「二、一……、ゼロ！」

そう言った瞬間、

二人が注目していたコンビニの影から、杖をついた老人がゆつくりと現れた。

「お兄ちゃん、バスじゃなかったよ」

「あれー？ おつかしいなあ」

頭を掻く良太に、お腹を抱えて笑う美咲。バスは、少し遅れて二人を迎えに来た。

バスには、数人の乗客しかいなかった。

はしゃいで大声を出す美咲を軽く叱る。

バスが停まるたびに、あといくつ、あといくつと訪ねる美咲に閉口する。

やたらと降車ボタンを押したがる美咲の小さな手を押さえつける。それらすべてが、美咲にとっては楽しく、良太にとっては幸せだった。

だから、遊園地までの二十分は、あっという間に過ぎた。

市営のこの遊園地は、少し大がかりな遊具がある公園のようなも

のだ。小さなジェットコースターもあるけれど、子供向けだから、良太くらいの少年には刺激がない。それでも、ヤギやヒツジ、ウサギとふれあえる一角もあったりして、子供にも親にも、それから良太のように妹や弟を連れてくる兄にも、とても評判のいい遊園地だ。入園ゲートをくぐると、美咲は良太の手を引いて動物ふれあいコーナーに向かった。目当てはヒツジでもヤギでもなく、柵に囲まれたウサギ広場だ。

美咲のウサギ好きは相当なもので、身の回りの物にはたいていどこかにウサギのプリントや刺繍がある。

去年の冬、インフルエンザがはやっていて頃にマスクが必要になったけれど、どうしてもウサギのマスクが見つからなかった。ウサギじゃなければマスクを着けないとこねる美咲に、母は半分呆れながらも、白いマスクにウサギの刺繍を入れてくれた。それはウサギというよりも葉っぱがついたヒョウタンのように見えたけれど、美咲はそれを着けてくれた。母の指に巻かれた絆創膏を見て、美咲なりに気を遣ったのかもしれない。

それからだったと思う。ウサギ柄でなくてもしぶしながら身に付けてくれるようになったのは。

良太は、そんなことを考えながら美咲を眺めていた。

ウサギ広場はそれほど広くないから、子供だけが入っていいことになっている。良太は小学生だから入ってもいいのだけれど、美咲くらいの子たちと一緒に遊ぶのは少しみづともないと思っただけには入らなかった。

親たちは柵の周りのベンチに座って、はしゃぐ子供たちの写真を撮っている。良太の家のパソコンにも、ウサギと遊ぶ良太の姿が残っているけれど、

そういえば、美咲がウサギと遊んでる写真はなかったな。

「お兄ちゃん、捕まえたよ！」

大きなウサギを抱きかかえて、美咲がよろよろと歩いてくる。ウサギは少し迷惑そうな顔をしていたけれど、抱かれ慣れているのか、

おとなしくしていてくれた。

「放してあげなよ。だっこされると暑いってさ」

そう言われて素直にウサギを放す美咲を見ながら、カメラを持ってくればよかったな、と良太は悔しがった。かわいいのは今のうちだけよ、と親戚のおばさんにからかわれたことがある。そんなことはない、と思うけれど、少し不安になる。もし、

もし、マーナさんみたいになっちゃったら。

まさかね、と苦笑いしていると、突然少年が良太の前に顔を出した。

「良太、なに変な顔してるんだ？」

「あつ、山田…じゃない、ヤマカワか」

「どっちでもいいよ。つか山田が正しいんだけど」

この少年は良太のクラスメイトで、山田銀河という。最初と最後の一字ずつを取ってヤマカワというあだながついているけれど、ヤマダもヤマカワも名字のようだから良太はいつも間違っってしまう。山田本人としてはせっかく銀河というかつこいい名前があるのだからそう呼んで欲しいところだけれど、今のところ少年はクラスの担任を含むほとんどの人からヤマカワと呼ばれている。

ヤマカワは、良太とウサギ広場を三回ずつ交互に見てから、最後に良太に向いた。

「で、良太は何だ。幼女を愛でてたのか」

「…バカなこと言うなよ。妹を連れてきたんだ。ほら、あそこ」

「幼女じゃないか」

「そりやまあ、まだ保育園通ってるし」

「愛でてたんだろ？」

「…」

「ほらみる。俺は間違ってないじゃないか」

ヤマカワには四つ上の兄がいるけれど、兄弟そろってこんな感じだ。ヤマカワは憎めないけれど、良太は、

なんとなく、苦手なんだよな。嫌いじゃないけど。

「ヤマカワは何でこんなとこにいるの？ 弟とか、いなかったよね？」

「出会いを求めてな」

「…怒っていい？」

ヤマカワは真剣な目つきで良太を正面から見据えた。その口をゆつくりと開き。

「だ・め」

良太はヤマカワを無視することにした。けれど、ヤマカワは真剣な顔つきのまま、良太の横に座った。

「ま、それは冗談だけだよ」

知ってる、と良太は頷いた。ヤマカワのすることは、たいてい冗談が悪ふざけた。

「ここなら情報が集まるかと思ってな」

「…情報？」

ナントカごっこでもしているつもりだろうか？

良太は、いつも美咲と一緒にテレビを観ているから、同じ年頃の子供たちとはあまり話が合わない。

かといって、今さらナントカ戦隊とかには興味が持てないし。  
「夏休みに入ってから、良太には会ってなかったよな。最近、俺たちの間にこんな噂があるんだ」

良太はごくりとつばを飲み込み、警戒する。

油断しちゃダメだ。

真剣な話をするふりをして、突然ふざけ出す。いつものヤマカワの手だ。驚けば、僕の負けだ。けれど、

ヤマカワは、ふざける様子もなく、あたりを見回してから小声で言った。

「出るんだってよ。妖怪が」

「はあ？」

やっぱりふざけてるのか、と一瞬だけ思ったけれど、

マーナさんだ。

マーナが聞いたらきつと怒るだろうけれど、良太にはすぐにそれがマーナのことだとわかった。

ヤマカワが指で目をつり上げる。

「こおーんな目でさ、」

やっぱりマーナさんだ。

人差し指を下に向けて、口の両端に添える。

「牙が生えててさ、」

牙はないと思うけど…。

「夕方にさ、小さい子を見つけると、追っかけてくるんだってよ」  
「…ふうん」

良太の胸が、少しだけ痛む。

マーナさんは、美咲が必要だと言った。それは人助けのためだと言っていた。

どうしても美咲に会いたいと、

夕日を金色に映し込んだ瞳で、

まっすぐに僕を見て。

けれどそれは、

僕だけに向けられた言葉じゃなかった。

良太は、昨日マーナのテントまで行ったことで、マーナとの間にかすかに細い糸のような繋がりが見えてきたような気がしていた。けれど、

その細い糸をたどってマーナの手まで行き着くと、そこには同じような糸が何本も握られていたのだった。

「それ、妖怪じゃないよ」

良太は、胸の痛みをごまかすように口を開いた。それは、自分とマーナとの繋がりを誰かに知ってほしい、という無意識からの言葉だった。

「僕、その人に会ったよ。話もした。その人が住んでる所まで行った」

ヤマカワは真剣な目つきのまま、口をあぐりと開けていた。間

抜けな表情だけれど、今の良太には、それを見ても笑いがこみ上げることはなかった。

「確かに怪しいけど、悪い人じゃない、と思う」

「マ…、マジっすか、先生。すげえっすよ、先生」

言葉はふざけているけれど、本当に驚いている、というのがわかる。良太は少し得意げに続けた。

「美咲に、特別な力があるらしいんだ。その力が、人助けのために必要なんだって」

「特別な力？　ってどんな？」

「それは…」

「人助けって、なによ？」

「ええと…」

良太が答えに詰まると、ヤマカワは片方の眉だけをつりあげた。

そして肩をすくませて両方の手のひらを上に向け、つまりは完全に人を馬鹿にした態度で、

「何もわからないんすかア、先生エ」

と言い捨てると、「俺もウサギと戯れるかな」とウサギ広場に入ってしまった。

ヤマカワはたちまち五匹のウサギを捕まえ、抱え上げた。子供たちはずるいずるいとヤマカワを取り囲む。けれどそれは決して独り占めを非難しているのではなくて、おどけるヤマカワを囃し立てて一緒に遊んでいるのだった。

「うわはははは！　ウサギたちを返してほしければこの俺様を倒してみろ！」

高らかに笑うヤマカワに子供たちは少しひるんでいたけれど、一人が勇気を出してヤマカワに体当たりすると、他の子供たちも果敢に飛び込んでいった。

「うおおおおおお…」

ヤマカワはやがて子供たちにシャツの裾を引っ張られ、奇妙な悲鳴を上げながら崩れるように地面に倒れ込んだ。こうしてウサギた

ちは無事解放され、めでたしめでたし、というわけだ。ヤマカワの背中がフンまみれになってしまったけれど、そのことに彼が気づいているかどうかはわからない。

美咲は他の子たちと一緒に笑っていたけれど、ぴくりとも動かないヤマカワを見てヤマカワショーが終わったことを知ると、ウサギ広場から出てきた。普通なら真っ先に良太のところに駆け寄ってくるけれど、ウサギに触った後だけは違う。広場の出入り口にある手洗い場で、真剣な表情で手を洗い始めた。

子供用にしては少し高い蛇口に苦労しながらすすぎ終わると、美咲はその場で手のひらをいっぱいに開き、ウサギ広場の反対側にいる良太に見せた。神妙な表情で、身動き一つしない。

良太はわざと難しい顔をして、美咲の手のひらを数秒見つめた。そしておもむろに頷く。美咲はやっと笑顔になり、ぱたぱたと走ってきた。

「ところで良太」

「うわっ」

「みぎゃっ」

駆け寄る美咲と、それを抱き留めようと両手を広げた良太の前に、突然ヤマカワが割り込んだ。美咲はフンまみれの背中にぶつかりそうになって、ぎりぎりのところでかわしたけれど転んでしまった。

「なななんだよヤマカワ」

「あのさ、」

美咲がヤマカワのすねを蹴ったけれど、ヤマカワは気にしない。

「俺を、連れて行ってくれないか？」

「…どこに？」

良太の胸が、ざわざわと騒ぎ出す。

「決まってるだろ、妖怪のとこだよ。会ってみたい」

「だ…、だめだよ、そんなの」

「先生えっ」

ヤマカワが、ねちっこく良太の顔を覗き込んだ。

「ほおんとおうに〜い、よおうかあい〜い、ああつたあんでえすかあ〜？」

「妖怪じゃないってば！」

良太は、美咲の手を引いて逃げてしまった。

美咲が転んでしまつて、やっと良太は足を止めた。

美咲はさつきから心配そうに良太の顔を見上げていた。それで良太にひっぱられて走っているのだから、転ばないほうがおかしい。

「けんかしちゃだめだよ…」

擦りむいてはいないようだったけれど、膝を痛そうに押さえながら、それでも美咲は自分より良太のことを心配していた。

「…そうだね」

けんかしたわけじゃないけど。

それでも、良太は美咲の優しさが嬉しくて、美咲の言葉に頷いた。「ちよつと早いけど、お昼にしようか」

売店はまだそれほど混んでいなかった。時間が早かったということもあるけれど、この売店はメニューが少ないのでお弁当持参の来園者が多いからだ。

「美咲、なに食べる？」

たこ焼き、焼きそばといったありふれたメニューの中から美咲が選んだのは、

「がっかりドッグ！」

もちろんこれは本当の名前ではない。

メニュー代わりに並んでいる写真には、ホットドッグと書いてある。ツヤツヤふつくらとしたコッペパンがスツと縦に割られ、そこにパンから溢れるくらいにたつぷりのレタスと大きなフランクフルトが乗っている。黄色い粒入りマスタードと真っ赤なケチャップで彩られ、立ち上る湯気が見えそうなくらいおいしそうな写真だ。

けれど実物は、なんだか萎れたようなコッペパンが切れ味の悪い



ナイフで雑に割られ、水気のないレタスと細くて小さなフランクフルトが申し訳なさそうに割れ目に収まっている。もちろんそれは寂しげに冷めていて、マスタードはなく味の薄いケチャップがちょいちょいと塗られている。

写真を見てホットドッグを選んだ客が十人中十人ともがっかりするので、いつしか「がっかりドッグ」と呼ばれるようになった。もちろん、売店を経営する市に苦情が入ったこともあった。

とはいえ、このホットドッグの真実の姿をほとんどの客が知っている今でも、これはこの売店の一番人気だ。誰もが写真との落差を一つのアトラクションとして楽しんでいるようだった。今では、店員に「がっかりドッグ！」と注文しても笑顔で答えてくれる。

良太が、料理好きな母の申し出を断って弁当を持ってこなかったのは、がっかりドッグを食べたいからだだった。

「お兄ちゃんは何食べるの？」

「わかってるくせに」

二人は、顔を見合わせてしばらく笑いをこらえた後、「がっかりドッグ！」と声を揃えた。

午後になり、いよいよ勢いを増してきた太陽を見上げながら、良太は「次は何をしようか」と考えていた。

横では、美咲がお腹をさすりながら「けふー」と言っている。結局美咲はがっかりドッグを半分しか食べず、残りは良太が食べたというのに。

まあ、

良太には、わざとらしくお腹をさする美咲の考えはお見通しだった。

少しお腹に余裕を持たせておいて、あとでソフトクリームが何かを食べたいって言い出すんだろう。

母がよく「甘いものは別腹なのよ」というけれど、美咲にはまだ

お腹は一つしかないらしい。賢いのか食い意地が張っているのか、美咲はときどきこうしておやつを空けておくために、お腹がいつぱいのふりをして昼ごはんを残すことがあった。必ず「けふー」と言ってお腹をさするから、すぐわかる。

それにしても、

一日楽しく遊ぶつもりだったけど、ヤマカワのせいで午前中はあまり楽しめなかった。

でも、これからジェットコースターやいろいろな乗り物に乗れば、ヤマカワやマーナさんのことなど忘れてしまうだろう。

「美咲、観覧車乗ろうか」

「うん！」

がっかりドッグを一本半食べた良太は、まだ激しい乗り物には乗りたくなかった。この観覧車は、小さいけれどとてもゆっくり回るから、お腹がこなれるくらいの時間は稼げるだろう。

大人二人が乗ったら窮屈そうな小さなゴンドラの中は、むうつと暑かった。少しだけ窓が開けられるけれど、熱い空気が逃げるほどではない。鉄製の手すりを「あちち、あちち」と握りながら、それでも美咲は楽しそうに空中からの眺めを楽しんでいるようだった。

美咲は、

良太は、笑いをこらえながらその姿を見ていた。

いつ気づくかな。

遊園地のことで、美咲に内緒にしていることが、一つだけある。

この観覧車とミニSLの間にある、池。

これがウサギの形をしていて、一部ではウサギ池と呼ばれていること。ウサギ好きの美咲はいつ気づくだろうか。気づいたら、どんなに驚くだろう。それが楽しみで、良太はこの遊園地に来ると必ず美咲と一緒に観覧車に乗る。けれど、

今回も、美咲はウサギ池に気づかなかった。

美咲の目は、向こうのジェットコースターに向いていた。

美咲は恐がりだけれど、こういう乗り物は大丈夫らしい。もっと

も、美咲でも乗れるようなコースターだから大したものではないけれど。

子供向けとはいえ、何度も連続で乗ればそれなりにこたえる。

ほとんどの子供が一日パスポートを持っているから、くりかえし乗るのがあたりまえで、みんなそうしている。良太も、昔は何回連続で乗ったかヤマカワや他の友達と競っていた。

何度目か忘れるほど乗って、もう一回乗りたいと美咲はせがんだけれど、良太は乗り場近くのベンチに崩れるように腰掛けた。

帽子のつばの下から、美咲がいたずらっぽくのぞき込む。

「疲れちゃった。ちよつと休ませてよ」

美咲は、しょうがないなあ、と良太の隣に座った。

子供たちの歓声と安っぽい音楽、蝉の声とコースターの轟音が入り交じって、ここはかなり賑やかだ。けれど、とても気が休まる。肌はじりじりと焼かれて、

日焼け止め持ってこなかったから、帰ったらお母さんに叱られちゃうな。でも、

夏の陽に焼かれるのは、とても、心地良い。

足をぶらぶらさせている美咲を見ると、その目は、向こうでジュースを飲んでいる子供を追っている。

そろそろ、かな？

美咲は、ちらちらと良太の顔を見る。良太は気づかないふりをして、暑いなあ、と空を見上げた。

「お兄ちゃん、あの…」

「なに？」

「ソフト…クリーム…」

ほらきた。

「あれ？ さっきお腹いっぱいって言ってなかったっけ？」

にやり、と笑う良太に、美咲は少しむっとする。

「甘いものはべつばらのよ」

別腹じゃないだろう、と思ったけれど、下から見上げるようにねだられては断れない。

良太は、母から預かったお小遣いを美咲に渡した。

「じゃあ、買っておいで。僕のジュースもお願い」

やっぱり僕は甘い。いいんだ、しつければお母さんに任せるんだ。

下手なスキップで売店に向かう美咲を見送りながら、良太は苦笑いした。

美咲がいなくなると、とたんに頭の中にマーナが割り込んでくる。マーナとジュースを分けあったことを思い出して良太は真っ赤になったけれど、その直後、今もマーナが待っているかも知れないということも、思い出した。

それも一時のことで、美咲が早くも口の周りを真っ白にして戻ってくる、マーナのことなど忘れてしまった。

## 第2章 系（2）

### 第2章 系（2）

夕方までたつぷり遊んだ二人は、公衆電話で母にこれから帰るところを伝えた。

ご飯の前には手を洗うこと、遊園地から出る時には連絡すること、寄り道しないで帰ること。母のいいつけはこれだけだった。市営遊園地は夕方には閉まってしまつので、この約束を守れば、帰りが遅くなることはないから。

夏の夕日はとてもゆっくり降りて行く。

誰も気づかないくらい緩やかに暮れて行く空に、決して追い立てられることもなく、

バスから眺める町は、のんびりと夏の暑い夕暮れを楽しんでいる。雑誌で作ったわずかな日陰に隠れながら、大きなスイカを重そうに運んでいる人がいる。

大変そうだけれど、あの人はきっと家族そろって大きく切ったスイカにかぶりつく姿を思い浮かべて歩き、だから楽しそうにも見える。

バスのエンジン音のほんの小さな隙間から蝉の声が滑り込み、ガラス一枚の向こうが確かに夏だと知らされる。

「お兄ちゃん」

小さな呟きが寝言だとわかって、良太はそつと美咲の頭をなでた。良太は、遊び疲れて眠ってしまった美咲が倒れないように肩を支えながら、今日は本当に来てよかったな、と笑みを漏らした。

遊園地へ行くという約束を覚えていてくれてうれしかった、と美

咲は言っていた。

美咲との約束。

そして、母との約束。

帰るときは電話すること、寄り道をしないこと。

良太には、

もう一つ、

気になる約束があった。

約束、したわけではないけれど、

美咲に会わせてくれ、というマーナさんの頼みに答えを、

出さないまま、

僕は逃げた。

約束をしたわけじゃない、けれど。

逃げるのは、もっと卑怯じゃないだろうか。

そして何よりも、マーナさんは、僕の答えを待っている。それは、

約束と同じ事だと思う。

「でも」

ちりちりという、今までに経験のない痛みを胸に感じて、その痛

みをごまかすように良太は口を開いた。

「誰でも、よかったのかな……」

言い終わるか終わらないかのところで、良太は慌てて口を押さえた。

聞こえたかな……。

横目で見ると、ヤマカワは手を頭の後ろで組み、口笛を吹くように口をとがらせている。良太のつぶやきが聞こえたけれど、わざとらしく、聞こえてないふりをしているようだ。もっとも、バスの中だから実際には口笛を吹いていないあたりがヤマカワらしい。

良太は、口を押さえて遮った言葉の続きを、今度は声にならないようにつぶやいた。

「僕らじゃないとだめだったんじゃないの……？」

ヤマカワの話がどこまで本当かはわからないけれど、マーナが良

太や美咲以外にも声をかけていることは間違いないだろう。けれど、僕は、荷物運びをさせられた。腹が立つけど、それでマーナさんとの距離が少し縮まったとも思う。すみかを見せてくれた。僕に気を許していなければ、そんなことはしないと思う。

僕は、

きつと、他の人とは違う。

良太は、バスを降りると何も言わずに美咲の手を引いて歩き出した。

美咲は目が覚めたばかりで、ぼんやりとしている。手を引かれるまま、歩いている。

そのすぐ後ろには、ヤマカワがついてきていた。

「なあ、どのくらい歩くんだった？」

「もうすぐ。その角を曲がったところ」

そして良太は、

立ち止まる。

左へ行けば家、右へ行けば怪獣の木がある空き地。

良太は、

美咲の手を引いて、右の道を選んだ。

「お兄ちゃん？ おうちはあっちだよ。帰らないと、叱られるよ」

「うん、ちよつとだけ。ね」

そうだ。

お母さんとの約束も大事だけれど、

マーナさんが、人助けをするというのなら。

それを手伝うのだって、大事だ。帰りが少し遅くなっても、バスに乗りそこねたとか、ヤマカワと話をしていたとか、少しくらい言い訳できる。ちよつと、会わせるだけ。それだけだから。

「かいじゅうの木…」

美咲が不安そうに良太にしがみつく。

「大丈夫だよ、今日は」

本当は、もっと恐い、逆三角形の目のマーナさんがいるのだけ

ど、それはあえて言わない。良太は、自分がずるくなったような気がしていやだった。

空き地の前に出ると、

マーナがぼつりと立っていた。

その背中はいささびしそうで、けれど何かと対峙するように、緊張に包まれている。

「あ…あれが妖怪つか…。セーラー服とはまたマニアックな…」

ヤマカワの甲高い声に気をそがれたように、マーナが振り返った。

「おい」

マーナが呼びかけたのは、ヤマカワではない。その目はまっすぐ良太に向いていた。

「何だ、こいつは」

「あ、その、僕の友達のヤマカワ」

「どうも。山田っす」

マーナは片方の眉をつりあげた。

「…どっちだ。いや、どっちでもいい。なぜ連れてきた」

「その…」

連れて来たかったわけじゃない。勝手について来たんだ。

「知ってます？ お姉さん、最近噂になってるの」

ヤマカワが割り込んでも、マーナの視線は良太を貫いたままだった。

「僕も今日聞いたんだけど、最近この辺に、妖…」

「よう？」

「よう…」

「なんだ」

ゴホン、と良太はわざとらしく咳をした。

「よう…幼稚園の帰りに、小さい子が声をかけられたって」

なんだそのことか、とマーナはつまらなそうに鼻を鳴らした。

「ああ、何人かの子供に訊いた。美咲と同じように、見えるかどうかを」



「それぞれ。それで、」

ヤマカワがマーナの正面に立つ。マーナが鋭く睨んでも動じない。ヤマカワは度胸がある、というよりも、

無神経なだけなんだよな。

「それが噂になってるんすよ。最近、妖ムグツ」

良太が慌ててヤマカワの口を塞ぐ。

ヤマカワはすかさず良太の手をべろりと舐める。

「ひいやあああ」

「おまえ、」

ハンカチで念入りに手を拭う良太を冷たく見下ろして、マーナは口を開いた。

「わたしが遊びでこんなことをしているとも思っているのか？」

「え……？」

「人助けだと言っただろう。そして、わたしに必要なのは美咲だ」  
ちら、と目を向けられた美咲が、良太に駆け寄ってしがみつく。

「こんなやつに用はないし、……正直言つて、お前にも用はない。必要なのは美咲だけだ」

用はない。その一言に、良太の心が小さくひび割れた。

「……噓つき」

良太はぐつと唇を噛んだ。

それに応じるように、マーナの小鼻がぴくりと動く。

「マーナさんは噓つきだ。美咲だけ、って、誰でもいいんでしょ？  
だからいろんな子に声をかけて、」

飲み込もうとした言葉は、けれど、良太の唇を押しつけて溢れる。

だめだ、これを言っちゃだめだ。言ったら、

「マーナさん、自分がなんて言われてるか知ってる？」

言ったら、終わってしまう。

「この辺に、妖怪が出るって。マーナさんのことだよ」

終わってしまう。

恐る恐る、ヤマカワが良太とマーナの間に入った。

「まあ、あの。ほら、みんなガキだから。勝手なことをね。ほら、ね。イヤア、まさかこんなにきれいなお姉さんだなんて知らなかったから。あはは。良太、おまえが俺を連れて来たがらなかった訳がわかったよ。こんなきれいなお姉さん、独り占めにしたいよな。あはは、は」

マーナの視線は、まるでヤマカワが透明であるかのように、ヤマカワの向こうの良太に向けられている。

ほんの数秒の沈黙のあと、

「わたしはな、」

小さいけれど、それは、強い声だった。

「自分の目つきが少しきつい事は知っている」

「す、少し…？」

「そのせいで、たまに人を怯えさせることも知っている」

「た、たまに…？」

マーナはうつむき加減で良太に顔だけを向ける。

「だからな、妖怪と言われても、気にはしない」

それが本心かどうかはわからないけれど、良太は少し安心した。けれど、

次の瞬間、マーナの眼に鋭い光が戻った。

「わたしは美咲を選んだ。誰でもいいわけじゃない。それがわからないのなら…、」

言わないで。

「もう、」

その次の言葉は、

「もう、いい」

少ない言葉。けれどそれは、決別を伝えるには十分だった。

良太にはわかっている。自分の口から出た言葉が、それを招いたこと。けれど、

良太はまだ、誤って相手の喉もとに突きつけてしまった剣を収める方法を、知らなかった。

何も言わずにうつむいている良太に背を向けると、マリーナはそのまま立ち去ってしまった。

ぷつり、と細い糸が切れた音が聞こえたような気がした。

「りよ…うた…くん？」

ぽと、と良太の目から涙が落ちた。

「俺のせい…、だよな？　ね。俺が悪いんだ。うん」

美咲がヤマカワのすねを思い切り蹴る。ヤマカワは、「うわあ痛い痛い」と大げさに転げ回った後、

「じゃ…、じゃあな」

と言つて帰ってしまった。

「お兄ちゃん…、帰ろ」

「…うん」

美咲に手を引かれて、良太はのろのろと家に向かった。

「お兄ちゃん、けんかはだめよ？」

「うん」

「明日、ちゃんと謝るのよ？」

くす、と良太は笑った。お母さんとまったく同じことを言っている。

「みんなあのオトコが悪いのよ」

ぶふつ。

ドラマかなにかで聞いたセリフだろうか？

「美咲、ヤマカワのこと嫌い？」

突然の質問に、美咲は戸惑った。

嫌いといえば嫌い。でも、ヤマカワショーは面白い。

「うーん。はんぶん嫌い」

「半分か…」

美咲は、苦笑いの良太をひきずるように家に向かった。

もそもそと晩ごはんを食べる良太に、母は首をかしげた。けれど、たぶん遊び疲れているんだろう、くらいにしか思わなかった。

美咲は、こんなにはしゃいでいるのに。母は、対照的な兄妹の様子を楽しみながら、美咲の延々と続くおしゃべりにつきあっていた。ジェットコースターに何度も乗ったこと、良太がふらふらになってだらしなかったこと、真っ白なウサギと茶色いウサギがいたこと、昼ごはんの前にちゃんと手を洗ったこと。

美咲はときどき、話を止めて良太の顔をちらと見る。けれど良太はそれに気づかず、美咲は一瞬だけ悲しそうな表情を浮かべてから話を続けた。話すことがなくなるまで、しゃべり続けた。けれど、最後まで、良太がマーナとけんかをしたことは、話さなかった。

翌朝、目は覚めたけれど起きあがる気になれず、良太は天井を見つめていた。

今朝は、少し涼しいな。

ゆうべは晚ごはんのあと風呂に入ってすぐ寝てしまったから、目が覚めたのがいつもより早いということもある。それに、カーテンの隙間からは夏の透明な朝日のかわりに厚い雲が見えている。久しぶりの曇り空だ。

なんだか体がだるい。きのう遊園地で遊んだ疲れなのかもしれないし、心の重さがそうさせているのかもしれない。けれど、

謝ってしまえば、気が楽になるのはわかっていて。けれど、

「僕だけが悪いわけじゃないし」

もう一度寝ようと目を閉じると、台所から、かたんと物音がした。

良太は喉の渇きにも気づいて、部屋を出た。

「ふふんふんふんふんふん」

台所から、母の妙な鼻歌のようなものが聞こえる。リズムは変幻自在、音程も微妙。美咲には音楽のセンスがかけらもないけれど、それはおそらくこの母親の遺伝だろう。

良太は、以前にも母の鼻歌を聞いたことがある。気にもせず、声を掛けると母は慌ててしまい、真っ赤な顔をして「やつ、りよつ、こつ、」と妙な叫び声を残して逃げてしまった。美咲もそのうち自

分の鼻歌を聞かれるのが恥ずかしくなるのかもな、と、母が残した片方のスリッパを見下ろして、良太は思ったものだった。

「ふあゝあ」

良太がわざとらしく大きな声であくびをすると、鼻歌がぴたと止まった。台所に入るとすぐに母と目が合い、ほんの一瞬だけ微妙な空気が流れたけれど、ふたりは

何も聞かなかったわよね？

何も聞いてないよ。

という、無言のやりとりでそれを断ち切った。

「良太、今日は早いね」

「ゆうべ、はやく寝ちゃったから。もう会社に行くの？」

「もうちょつとしたら。良太、一緒に朝ごはんにしましょうか」

夏休みに入ってから、良太が起きるのはいつも母が仕事に出た後だった。もともと無口な母親だから会話が弾むわけではないけれど、

やっぱり朝ごはんは一緒に食べた方がいいな。

「お母さん、僕、明日から早く起きるよ」

その理由を飲み込むまでのほんの少しの間をおいて、母は穏やかに頷いた。鼻の頭にマーマレードがついていなければ、最高の笑顔と言えるだろう。

「お母さん、鼻の頭……」

「ああ、ニキビ？ みつともないわよね」

よく見ると、マーマレードの隣に確かにニキビのようなものが出てきている。

まあ、どうせまた付くかもしれないし、食べ終わっても気づかなかったら言おう。

良太は目玉焼きに塩とコショウを振り、半熟の黄身に箸を刺した。つやのある黄身がとろりと流れだし、コショウの粉を巻き込みながら白身の丘を駆けおる。

白身を少し切り取って、黄身を絡めて口に運んだ。

甘くて、しょっぱくて、少しピリツとして。

あつたかい目玉焼きを食べるのは、久しぶりだな。固焼きなら冷めててもおいしいけど、やっぱりあつたかい半熟がいちばんおいしい。

みんなで一緒に食べるときは、母はそれぞれの好みにあつた焼き方をしてくれる。ひとつのフライパンで一度に焼き上げるのに、それぞれが好みの焼き加減になっているのが良太には不思議だった。

良太は半熟に塩コショウ、美咲は固焼きにケチャップ。父はやや固めの半熟に醤油で、母は固焼きにソース。それぞれ思い思いの食べ方をするけれど、良太は、フライパンの大きさに焼かれた目玉焼きを四分割して食べる時に妙に家族というものを意識するのがおかしくて、好きだった。

「あら、もう行かないと。良太、」

「うん、片付けておくよ。行つてらっしゃい」

慌ただしく家を飛び出す母を見送りながら、良太はつぶやいた。

「あ、マーマレードのこと言つたの忘れた…」

たまつた宿題を片付けながら美咲が起きるのを待つて、良太は怪獣の木がある空き地に向かった。

「仲直りするの？」

「うーん。お姉ちゃんがいたらね」

「ごめんなさいって言つたのよ？」

「…わかつてるってば」

けれど、

そこにマーナの姿はなかった。

美咲が良太の背中に隠れたままちらと空き地を見回して、言った。

「いないね」

「うん」

「仲直りできないね」

「…うん」

良太は、美咲を肩車して河川敷に行つてみることにした。ひよっ

としたら、まだ寝てるのかも、と。けれどそこには、

まるで先日のが嘘だったように、何もなかった。

「ここに、お姉ちゃんちがあつたの？」

「テントがあつたんだ」

良太は、父に連れられて何度かキャンプをしたことがある。テントをたたんだ後、父に「糸くず一つ残すなよ」と厳しく言われて、はい回るようにゴミを拾った。良太はマーナのテントがあつたあたりにしゃがみ込んで地面を見たけれど、やはり何も残されていないかった。

美咲はしばらくじつと良太を見ていたけれど、「お腹すいた」と良太の背中によじ登った。良太は、「うん」と頷きもしないで答えた。

結局、次の日も、その次の日もマーナには会えなかった。

### 第3章 鍵（1）

#### 第3章 鍵（1）

久しぶりに晴れて、夏らしい暑さと夏らしい蝉の声が戻ってきた。良太と美咲は、暗い空にぽつりと、名残惜しそうに夕日を反射している雲を見上げながら家に急いでいた。

昨日の夜、珍しくヤマカワから電話がかかってきた。美咲を連れて遊びに来いという。

ヤマカワの家には何度か行ったことがあるけれど、もちろん美咲を連れて行ったことはない。

「いや、別に、なんて言うか」

ヤマカワはジュースを注ぎながら、言いにくそうに切り出した。

「あのお姉さんとは、その、あれから」

「会ってないよ」

「そうか」

美咲はヤマカワの背中にまわって思い切り蹴り飛ばした。ジュースがはねてＴシャツについてしまったけれど、ヤマカワは気にする様子もない。

「ゴメン」

珍しく元氣のないヤマカワを見て、良太はやっと、ヤマカワが自分を責めていることに気づいた。

「ヤマカワは悪くないよ」

「悪いよ」

「美咲は黙ってて」

「…だって」



「僕が、言っちゃいけないことを言ったから。だからマーナさんは怒ったんだ。言っちゃだめだって、わかってたのに」

ヤマカワはしばらく黙っていたけれど、

「まあ、」

と突然明るい声で言い放った。

「お前がなんて言おうと、俺は俺が悪いと思う。だからお詫びに、立ち上がり、

「これからたっぷり三時間、ヤマカワショーで楽しんでくれ！」

二人だけのためのヤマカワショーは、うるさいと文句を言いに来た隣のおばさんまでも観客席に座らせ、きっかり三時間続いた。

お腹が痛くなるほど笑って、目が赤くなるほど泣いて、ヤマカワの家を出る頃にはすっかり日は傾いていた。少し遅くなってしまったけれど、家には連絡してあるから大丈夫だ。

雲は、ふちのところだけを金色に光らせて、けれどそれは目に見えるほど急激に勢いをなくしてゆく。きらきらと何度かまたたくように輝いたあと、ふい、と光を失った。

「美咲、ヤマカワショー、おもしろかった？」

「うん」

「ヤマカワのこと、好きになった？」

「ううん。でも許してあげる」

厳しい妹だな、と肩をすくめる良太の手が、ぐいと後ろに引つ張られた。

美咲が引つ張ったわけではなく、

良太と手を繋いだまま、立ち止まってしまった。

そうか、ここを曲がれば、

怪獣の木がある空き地に向かう道だ。

「美咲」

さつきまで楽しそうだった美咲が、口を尖らせて泣きそうな顔をしている。

「おんぶしてやるから。な？」

美咲は口を尖らせたまま、良太の背中にしがみついた。

良太はもう何も言わず、早足で空き地の前を通り過ぎようと思った。怪獣の木が怖いわけではないけれど、

マーナに言ってしまった酷い一言が、今は自分の胸に突き刺さっている。

良太は足下だけを見て歩いていたらけれど、空き地の前で、「あ」という美咲の声に顔を上げた。

そこに広がっていたのは、異様な光景だった。

怪獣の木から十メートルほど離れた所、空き地の真ん中に発電機が置いてある。その横には簡易テーブルがあり、いくつものダイヤルやメーターが付けられた操作盤が乗せられていた。

操作盤からは一本の太い電線が怪獣の木の先端まで続いており、そこから何本かに分かれた電線が、クリスマスツリーの飾り付けのように、木を何重にも巻きながら地上まで下りている。その途中からはさらに電線が分かれていて、それらは傘を広げたように斜めに張り出し、木の周囲の地面に突き刺された金属製の杭に繋がっている。

そしてマーナが、電線の張り具合を確かめていた。

マーナは、良太たちには気づいているはずだけれど、何も言わない。

良太も、言わなければならない言葉がなかなか出てこない。

ごめんなさい、ってひとこと言えればいいだけなのに。

暗がり目目が慣れるほどの時間が経ったけれど、良太もマーナも、口を開くことはなかった。マーナは作業をしていたからまだいいけれど、良太は美咲をおぶったまま黙って突っ立っているだけだ。

沈黙の重さを、いちばん感じていたのは美咲だった。そして、その重さに最初に耐えられなくなったのも、美咲だった。

「お…お姉ちゃん」

言ってから、しまった、とあわてて自分の口を塞ぐけれど、もう遅い。

マーナはまっすぐこっちを見ている。美咲は、ひい、と良太に強くしがみついた。

「みーちゃんね、あの…お手伝いするよ」

驚いたのは良太。美咲が自分からこんなことを言い出すなんて。呆れたのはマーナ。美咲にこんなことを言わせるなんて。

「だ…だから…、仲直り…して…」

マーナの視線は、美咲から良太に移った。その目は、何か言つてとがあるだろう、と言っている。

「マーナさん、僕、酷いこと言つた。…ごめんなさい」

「まったく…。妹の付き添いがないとだめなのか、お前は「う…」」

まったくだ。何も言い返せない。

「僕、もうマーナさんに会えないのかと思つてた」

「仕事があるから戻ってきた。それだけだ。それで、美咲」

良太は、自分の背中で美咲が縮こまるのがわかった。

おびえる美咲に、良太は優しく語りかける。

「大丈夫。仲直りしたんだし、もう恐くないよ」

恐くないよ、と言われてその恐怖を打ち消せるほど簡単なものではない。美咲は警戒したまま目だけを出してマーナを覗いたけれど、やっぱりまた隠れてしまった。

「美咲、手伝うと言つたな」

マーナの呼びかけに、美咲はさらに縮こまる。そのうち小さくなって消えてしまうんじゃないか、と良太は半分本気で心配した。

「難しいことじゃない。いくつか教えてくれればいい」

もうちよつと優しく呼びかければいいのにな。

マーナは、構わず問いかける。

「あの木が怖いと言つたな」

それよりも今は、マーナさんを恐がってると思っけど。

「…うん」

美咲はそれでもけなげに答える。

「どうして恐いんだ。怪獣が嫌いなのか」

「ううん」

良太の鼓動が、強く、早くなる。僕の見えない物を見ている美咲。マーナの目が、ある確信に近づく。

「…怪獣の周りの、光ってるやつが恐いのか？」

光？ あの木の周りに？

良太は木を見上げた。もちろん、良太にはただの木に見える。それが、美咲には、

「うん」

「どんな光だ？ 四角？ 三角？」

良太には、わかった。

マーナさんは、自分には見えなくても、知っている。美咲が、何を見ているのか。それはたぶん、マーナさんが今までにも同じことを、彼女の言う「人助け」を、何度もしているから。

美咲が、良太の陰から顔を出した。木をじっと見て、つぶやく。

「…丸いの。ボールみたい」

「いくつくらい？」

「いっぱい」

マーナは、納得したように木を振り返った。

そして美咲に、最後の質問をする。

「光、だけか？ 他に何か、いないか？」

「いないか？ って…、その訊き方はつまり、人のようなもの、がないか、ということだろうか。」

あの木の下に、幽霊、が…？

「いる」

美咲の、普段よりも確かに低い声に、良太は震えた。暑いはずなのに、両腕に鳥肌が立つ。

「み、美咲…、いるって…、なに、が？」

「ボールがじゃまで、よく見えないけど…、」  
「けど…？」

「お姉ちゃんがいる。こっち見てる」

美咲はそう言つと、良太の背中にしがみついて、完全に良太の陰に隠れてしまった。

マーナはその様子を見て、さっきまでよりも少し穏やかに言った。  
「美咲、ありがとう。もう大丈夫だ。あの怖いのは、わたしが消してやる」

「…ほんと？」

美咲は、けれど、顔を出さずに弱く答えた。

「ちよつと、待つてよ」

自分だけが何も知らず、何も見えない良太は、美咲を背にかばつたまま、マーナに問う。

「大丈夫って、これから何をするの？ それから…、美咲に見えてるものって、…なに？」

マーナは、しばらく沈黙した後、話し出した。

「古い大きな木には、」

ただしそれは、良太の問いへの直接的な答えではない。

「たくさん『想い』が集まるものだ」

良太には、マーナの話すことが理解できない。けれどマーナは構わず、感情を見せずに独り言のようにつぶやき続ける。

「想い、願い、祈り、思い出。木にはそういったものが集まる。人は古来から、木に寄り添って生きてきたから」

「ひよつとして、美咲の言ってる光が、その『想い』だつてこと？」

なかなか賢いな。

マーナは良太の飲み込みの早さが嬉しかったけれど、彼女の表情からはそれが読み取れない。

「そう、『想い』というのは魂のカケラみたいなものだからな。それがいくら集まっても危険はないが…」

「ない、が？」

マーナは黙ってしまふ。良太は、その沈黙に答えを探す。

「『想い』と一緒に、幽霊がいる…？」

「幽霊じゃない」

即座に否定するマーナに、良太は少し安堵した。けれど、

「じゃあ、なんなの？」

「この近所にな、おばあさんがいる」

マーナは、また良太の問いに直接の答えにならない話を始めた。

良太には、マーナがより話をわかりやすくするためにそうしていることがわかってきていたし、マーナは、多少遠回りをしてても良太は最後まで話を聞いてくれるとわかってきていた。

「もうだいぶ弱っていて、この夏を乗り切れるかどうか、といったところだ」

遠くに住んではいるけれど元気な祖父母を持つ良太に、老人の死は、理屈の上でしか理解できていない。寂しくて、悲しくて、ぽっかり穴が開くこと。そういう、遭される者の気持ちはなんとなくわかるけれど、去る者の気持ちは、いくら想像しても実感できるものではなかった。

「そのおばあさんがな、」

マーナは、良太の視線を誘い、木の方に向ける。

「あの木に、強い『想い』を残して苦しんでいる。その『想い』を解き放つて、おばあさんが心おきなく去れるようにする。それが、わたしの仕事だ」

良太には、マーナの声がだんだん小さくなった理由がわからなかった。

「じゃあ、人助けってというのは…、そのおばあさんのため？」

「そうだ」

良太は、昨日とは違う理由で、マーナの横顔を見つめた。

昨日は、きれいだな、と見とれてしまった。でも今日は、悪い人じゃなかった。顔は怖いけど。

これからこの世を去ろうという人を救う。なぜ、とか、どうやって、ということはわからないけれど、それはたぶん素晴らしいことなのだろう。

マーナさんは、悪い人じゃなかった。顔は怖いけど。でも、

それならどうして、マーナさんは、

あんな、後ろめたそうな表情を、しているんだろう。

「それで、『想い』を解き放つって、どうやって…？」

マーナは、触れて欲しくないところに触れられた動揺を隠せない。決して良太に目を合わせようとはせず、

「とても、酷いことをする」

と、つぶやいた。

「え？」

酷いこと？

「あの木に、ある種の電流を流す。そうすれば、『想い』は吹き飛んで、消える」

「ふーん」

良太は、よくわからないけどそうなんだろう、と軽く相づちを打つ。そんな良太に背中を向け、マーナは言い放った。

「もう帰っていいぞ」

そんな言い方はないだろう、と思うけれど、そろそろ帰らないとお母さんに叱られてしまう。良太は美咲の手を引き、家に向かった。美咲、ありがとう、というマーナの声が聞こえてきたけれど、

僕には一言もなしか。

美咲は役に立った、らしい。

マーナさんの目的も、わかった。

あの木に、僕には見えないけれど何かがいて、それはもうすぐいなくなるんだろう。

僕にとっては何も変わることはない。

美咲は、もうあの木を怖がらなくなるのかな。  
マーナさんには、もう、会わないのかな。  
僕は、

結局、何もしなかった。

マーナさんにおびえて、

重い荷物を運ばされて、

ジュースおごってもらって、

美咲を連れてきて。

明日からは、普通に、夏休みを過ごそう。

良太は、美咲を背負って家へと急いだ。

今日の美咲は、いつもより少し重く感じた。



### 第3章 鍵（2）

#### 第3章 鍵（2）

残念なことに、晩ごはんのときに試みられた美咲によるヤマカワシヨ一の再現は、失敗に終わった。

美咲は歌が、控えめに言ってもご飯がまずくなるほど下手だったし、踊ろうとすると食事中はおとなしく座っていなさいと叱られてしまった。

けれど、シヨ一がどれほど面白かったかは、母にも十分伝わったはずだ。

母は楽しそうに美咲の話を聞いていた。けれど、視界の端には、ぼんやりと茶碗を見つめている良太がいる。美咲の話を聞きながら、それでも意識は半分以上、良太に向いていた。

美咲は相変わらず身振り手振りを交えて熱演している。いろんな歌を歌ってくれたこと、奇妙な踊りを見せてくれたこと、面白いだけじゃなくて悲しいお話もしてくれたこと。

けれど良太には、その声はまったく聞こえていない。

『想い』を解き放つ。

マーナさんは、そう言っていた。

それが、人助けた、と。

この近くに住んでいるおばあさんのためだ、と。

僕には、よくわからない。

わからない、けれど、何か、

何か、

胸の奥のほう、端っこではなくて、真ん中のほうに、

大きな石が詰まっているような、

いやな、いやな、いやな気分。

僕は、このまま、ぜんぶ忘れてしまつて、いいのかな。

「やくそくだよ」

そう。約束。

「お兄ちゃん」

そう。僕と、美咲の。

「良太？」

そう。僕と、お母さんの。

約束。それは、

「お兄ちゃんってば」

「え」

気がつくと、美咲が横に立っていた。良太の腕にしがみつき、心配そうに見上げている。

「良太、どうしたの？」

「ああ、ええと、なんでもないよ。ちょっと、ぼうつとしてただけ」

「お兄ちゃん、こんどヤマカワんちに遊びに行くときも連れて行つてね」

ああそうか。

約束だ。

また遊びに行こう。そうだ。

「そうだね、また一緒に行こう」

「遊園地も行きたい」

「うん、行こう」

「やったー！ やくそく！」

目の前に突き出された美咲の小指を見つめて、良太は思う。

美咲は、この細くて小さな一本の指に、何を託すのだろう。

小さな、小さな、小さな、小指。

それで何を信じ、何を願うのだろう。

小指と小指で交わされた、約束。

それは思い出の、最初の切れはし。

約束は、降り積もった想いの、いちばん底でいつまでも温められて。

やがて花が咲くように、実を結ぶように。

約束は咲き、いくつもの思い出をたわわに実らせる。

とても、酷いことをする。

マーナさんは、そう言っていた。

良太には、その意味が、今わかった。

マーナさんは、大切な物を消そうとしている。

願い。約束。記憶。『想い』。

それは、人と人を、いつまでも繋ぐものだ。

大切な人を信じ、

大切な人を想い、

大切な人を慈しみ、

そしていつまでも、大切な人と、共に。

良太は突然がたと立ち上がると、母が止めるのも聞かずに走って家を出た。

僕は馬鹿だ。どうしてもすぐ気がつかなかったんだ。『想い』を消す。それがどんなに酷いことか。マーナさん自身は、それを隠そうとは決してしていなかったのに、どうして僕は、気がつかなかったんだ。僕は、僕は、馬鹿だ。

良太が全力で走っているころ、マーナはまだ空き地にいた。

操作盤のいくつかのスイッチを入れ、ダイヤルを慎重に回す。ふうん、と唸るような音に神経を集中し、徐々に電圧を上げてゆく。

やがて、木がうつすらと青く光り出す。マーナはさらに慎重に、別のダイヤルを少しずつ少しずつ回す。そこに、

良太が駆け込んできた。わあっ、とわめきながら、マーナにはわき目もふらずに木に突進する。

マーナは慌てた。

「なっ、待てお前、おい！」

そう叫びながら、主電源を切った。瞬時に木の光は失われる。直後、良太は木に巻き付けられた電線を乱暴に引き剥がした。

もう一瞬、マーナがスイッチを切るのが遅ければ、良太は真っ黒に焦げてしまっただろう。マーナは、叫びながら暴れる良太を、呆然と見つめた。

何本かの電線を地面に引きずり降ろすと、良太はやっとおとなしくなった。気が済んだとかそういうことなく、叫び続けながら暴れたので体が動かなくなり、しゃがみ込んでしまったのだった。

「おい、何のつもりだ」

良太は、そう呼びかけられて初めて気づいたように、マーナを見た。ひ、と良太は後ずさる。マーナが怒っている。いつも通りの逆三角形の目が、さらに、今はつり上がっている。薄く開いたへの字の口からは、食いしばった歯がのぞいている。今、雷でも鳴ろうものなら、良太はきっと気絶してしまう。

良太は、けれど立ち上がり、ゆっくりとマーナに近づいていった。

「人助けなんて、嘘じゃないか」

さらに目つきを険しくするマーナにも、良太は動じない。

「あの木の周りには、光がいっぱいあるって、美咲が言ってたよ」

気づいたか。やっぱりな。

マーナは、軽く舌打ちをする。

隠していたことがばれたからではなくて、

良太が、知らなくてもいいことを知ってしまうことへの悔やみ。

「約束とか思い出とか、そんなの消しちゃだめだ！ おばあさんがどんな人かは知らないけど、その人のために他の人の思い出を消すなんて、許せないよ！」

マーナにはわかっている。良太が、どれほど妹を愛し、大切に思っているか。約束と思い出の持つ意味を、どれほど深く感じているか。だから、

マーナは、すぐには何も言えなかった。

とても、酷いことをする。

けれどこれは、人助けだ。

けれどこれは、とても、

とても、酷いことだ。

「お前の言いたいことはわかる。だがな、人の形を成さない程度の『想い』は、」

「程度の、ってどういうことだよ！ 大切じゃない約束なんてない！ 大切じゃない思い出なんて、ないっ！」

マーナは、良太にどう説明しようかと悩んだ。良太なら、きっとわかってくれる。けれど、どう説明したら。

マーナの沈黙の意味を、興奮した良太は正確に受け取ることができなかった。良太は、マーナが目をそらした隙に、操作盤に挿してある鍵を引き抜いた。

「おい、それはだめだ、返せ！」

慌てるマーナの姿に、良太は確信した。これがなければ、大切な思い出が消されることはないんだ。おばあさんには 悪いけど、たぶんこれで、たくさんの人たちのたくさんの思い出が、守られるんだ。

良太は逃げた。

マーナさんから逃げるのは、これで何回目だろう。けれど今度は。

人から、

物を、

奪って、

逃げた。

僕は泥棒だ。

違う、助けるためだ。

おばあさんを犠牲にして？

けれどたくさんのおい出を守るために。

おばあさんを犠牲にして？

人から物を奪って？

助けて、助けて、助けて。

熱い空気が、まるで粘りけを持っているように良太に絡みつく。頭の中がまるでぐるぐると渦巻いているようで、足がもつれる。

良太は、必死にもがきながら走った。

途中何度か転んで膝をすりむいたけれど、構わずに走った。

振り返るのも恐くて、鍵を握りしめて走った。

息を切らせて家にたどり着くと、

ドアの前で、母が待っていた。

「良太？ どうしたの？ 何があったの？」

「何でもない」

「すりむいてるじゃない」

「何でもない」

「良太」

「何でも、ないっ！」

良太は、母を押しつけて家に飛び込み、そのまま布団に潜ってしまった。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

返さなきゃ。謝らなきゃ。

理由はどうあれ、人の物を取ったのは間違いだ。

違う。これは、大切なおい出を守るためだ。

違う。泥棒は泥棒だ。

違う。僕は。違う。

夏用の薄い布団を通して、低い声が聞こえてきた。

久しぶりに聞く、父さんの声だ。どうしよう。叱られる。きっと、

ものすごく、叱られる。

わかってる。返さなきゃ。わかってるのに、叱られる。いやだ、いやだ、いやだ。

「良太、入るぞ」

びく、と良太は硬直した。

父は部屋の戸を閉め、こちらに歩いてくる。枕元に、どか、と座った。

「何があつた」

良太は答えない。答えられなかった。

「晩ごはんの最中に家を飛び出して、膝をすりむいて帰ってきた。ただことじゃないな」

「…何でもない」

「秘密か？」

秘密。隠し事。声に出して言えない、罪。

良太は、ぎゅっと目を閉じた。そうすることで、世界との接点をも閉じられるような気がした。けれど父は、それを許さない。掛け布団をはぎ取って良太の肩を強く掴み、良太をこの世界に引き戻した。

「こそこそ逃げ隠れするな、堂々としている。秘密を持つのは悪い事じゃない」

「…え？」

隠し事をしないこと。それが良い子の条件、だと思っていた。けれど、夏休みに入ってからというもの、良太は隠し事ばかりしている。それは悪いこと、だと思っていたのに。

「父さんにだって、お母さんにだって、隠し事くらいある。ただな、

やっと自分の方を向いた良太に、父は静かに語りかける。

「心配なんだ。良太がいじめられてるんじゃないか、とか。逆に、人に迷惑をかけてるんじゃないか、とか。どうなんだ？」

「そんなのじゃないよ」

「なら、自分で解決できるか」

「…うん」

後ろめたい気持ちはあった。僕は、マーナさんから鍵を奪った。迷惑をかけている。けれどこれは僕の問題だ。鍵を返すか返さないか、僕が決めなきゃならないことだ。

「なら俺は何も言わない。お前が困ったら手を貸してやるが、まずは自分で解決してみろ」

自分のことを、俺と言った。僕のことを、お前と言った。

良太にはその意味がよくわかる。これは親と子の会話じゃない。

父さんは、男と男の会話をしてきているんだ。良太はそれが嬉しくて、

泣いてしまった。

父は黙って部屋を出た。

あなた、どうだった？

さあな。

さあって、何があったか聞かなかったの？

大丈夫だよ。

ろくに話も聞かないで、なんでそんなこと言えるの？

大丈夫だってば。それよりメシ…。

良太は、泣きながら笑ってしまった。

さつきは男らしく見えた父が、母にはたじたじだ。

良太は、握りしめたままだった鍵を、枕元に置いた。初めて気づいたけれど、鍵に付いている小さなマスコットから、マーナと同じ、花の香りがする。型抜きしたフェルトを重ねて縫い合わせてあるそれは、動物なのは間違いないけれど犬なのか熊なのかわからない。もう何年もこの鍵と一緒に過ごしているのだろう、白いフェルトが薄く黒ずんでいて、花の香りがなければ汚く感じてしまったかもしれない。

これを返すか返さないか、僕が答えを出さなきゃ。

返すのは、おばあさんとマーナさんのため。返さないのは、誰の



ものかわからない、たくさんの思い出を守るため。  
その夜、良太が眠るまで、答えは出なかった。

### 第3章 鍵（3）

#### 第3章 鍵（3）

翌朝、良太はいつものように美咲の下手な鼻歌で目が覚めた。

よりによって枕元で歌わなくても、とは思うものの、べつに不快ではない。

「美咲、おはよう」

「おはよ」

美咲は、絵を描くのに忙しいらしく、そっけない返事を返した。

良太は、美咲の鼻歌を聞きながら、もう少しまどろむことにした。ゆうべは結局、何時頃まで起きていたのだろう。そう考えながら、今日、マーナに鍵を返すべきかどうか、良太は悩んだ。

布団の上で何度も寝返りをうちながら、結局答えが出ないまま、いつの間にか眠ってしまった。

良太が再び目を覚ました時には、もう昼を過ぎてしまっていた。

家の中はしんとしていて、美咲の姿は見えない。

胸騒ぎがした。最近、美咲はやたらと一人で外に出たがるようになった。もちろん、一人で遊びに行かせたりはしない。神経質すぎるくらいでないと子供は守れない、嫌な時代になったと両親が話していた。

「美咲？」

どこかで寝ているのか、慌てる兄を隠れて見ているのか。良太は、きつとそうに違いないとつぶやきながら、家中を探した。

台所、居間、父が書斎と呼んでいる押し入れの左側、母が物置と呼んでいる押し入れの右側。風呂場、トイレ、テーブルの下、洗濯機の中まで探したけれど、

美咲は、いなかった。

「美咲…？」

自分の声で、初めて全身ががくがくと震えていることに気づく。まさか、とドアを確認すると、

鍵が、開いていた。良太はそのまま家を飛び出した。

このあたりの遊び場といったら、家のすぐ近くのさわら公園。ブランコと滑り台、鉄棒と砂場があるだけの小さな公園。たまに、近所の子と一緒に遊ばせている。そこに、

美咲は、いなかった。

良太はあせった。美咲の行きそうな所なんて、たかが知れている。八割がた、この公園だ。けれど、

あとの二割を、良太は知らない。

「美咲ー！」

叫んでも返事は帰ってこない。

「良太くん？ どうしたの？」

近所のおばさんが心配そうに声を掛けてきて、良太は事情を説明した。誰にも知られないで、自分だけで美咲を見つけられればそれに越したことはない。でも、そんなことを言っている場合じゃない。お母さんに叱られても、お父さんに怒鳴られても、どんなに大騒ぎになっても、

美咲を、見つけなきゃ。

良太は走り回った。コンビニ、少し遠い公園、怪獣の木がある空き地、駅前まで行ってみたけれど、美咲は見つからなかった。

交通事故。どうしよう。誘拐。どうしよう。

まだ見てない場所、まだ探していない場所。そうだ、

工事現場。

大きな道路が通るから、森林公園が潰された。公園だった場所は、今は透明なプラスチックの防音壁で囲まれてしまい、少しずつ山を削る工事が進んでいる。

良太は走る。蝉の大合唱が近づいてくる。だんだん狭くなる森に、蝉たちは身を寄せ合うように暮らしている。「森を返せ」という張

り紙が何枚かあるけれど、これは蝉や鳥たちの声のような気がする。工事現場に着くと、良太は透明な防音壁にへばりついて美咲の姿を探した。昼休みなのか休工日なのかわからないけれど、工事の人の姿はないし機械も動いていない。誰かいれば美咲も簡単には入れないだろうけれど、これなら、誰にも見つからずに工事現場に忍び込むことができる。

良太は入口を捜した。大きくなくてもいい。防音壁の隙間とか、金網の破れたところとか。まさか鉄柵を乗り越えることはないだろうから、大人が気づかないような、足下の穴。

遠くから、美咲を探す声が聞こえてくる。さっきのおばさんが、何人かに声を掛けてくれたのだろう。大変なことになった、と良太は改めて自分が二度寝したことを後悔した。

工事現場をぐるりと回り込むと、作業員の休憩所だろうか、プレハブ小屋があった。その裏の金網に、小さな穴が空いている。美咲ならなんとか通れそうな穴。

自分が通れるほどは大きくないので、良太は金網によじ登り、乗り越えた。人に見つかったらきつと怒鳴られる。良太には、工事現場の人というと大きくて強くてうるさくて乱暴というイメージがあった。それでも事情を話せば手伝ってくれるだろうから、誰かに見つかったらそれはそれでいいと思っていた。

「美咲ーっ！」

工事現場は思ったより平らで、遠くまで見渡せた。住宅地のほうからはまだ森が残っているように見えていたけれど、それはなるべく森を残しているように見せかけるため、反対側から森を削っているからだった。削られた後はほとんど平らで、数台のブルドーザーやショベルカーの陰を見ると、あとはもう探す所はない。

良太はその場にへたり込んだ。もう、どうしたらいいのかわからない。

お母さんに知らせて、どうしたらいいか聞こう。心配をさせたくないけれど、このまま美咲が見つからなかったら心配どころの話

ではなくなってしまう。

家に向かって畑の横を駆け抜ける。全力で走るけれど、走っても走っても、前に進んでいない気がする。自転車に追い抜かれる。ああ、乗せてくれないかな。少しでも早く、家にたどり着きたいのに。やっと畑を過ぎて、角を曲がる。普段は気にしていなかったけれど、ここは少しだけ下り坂になっている。良太は下り坂で勢いを増したように感じたけれど、まだ、まだ、まだ、遅い。もっと速く、もっと速く、もっと速く走りたい。

家に近づくと、さっきのおばさんも走っていた。

「おばさん！」

「ああ、良太、くん、さっき、ね、」

おばさんはぜいぜいと息を切らしている。きっと、こんなに走ったのは久しぶりなのだろう。しかも真夏の炎天下、どれほど辛いだろう。すべて、僕のせいだ。

「さっき、人相の悪い人が美咲ちゃんを連れて歩いてたって。美咲ちゃん、泣いてたって。良太くんの家の方に歩いていったっていうから……」

おばさんの慌てぶりとは正反対に、良太の表情が少し和らぐ。

「マーナさんだ……」

「あら、知ってる人？ それなら……」

良太は、おばさんが言い終わらないうちに走り出した。最後の角を曲がって家が見えると、

玄関の前に、美咲がしゃがんでいた。その横には、

マーナがいる。美咲の肩を抱きかかえていた。マーナは、駆け寄ってきた良太を睨み付けた。

「たまたま見つけたんだ。国道を、泣きながら歩いていた」

マーナは、美咲の肩に回した腕に、ぐっと力を込めた。

「美咲……」

「お兄ちゃん……」

気が緩んだのか、美咲はわあわあと泣き出した。

「美咲、勝手に表に出ちゃダメじゃないか。探したんだぞ」

そのとき、マーナが、

良太の頬を叩いた。

「な…なにすんだよ」

「お前が何を思い悩もうと、勝手だ。しかしな」

マーナが、一段と凄みの効いた目つきで良太を睨む。

「美咲を、その犠牲にするな」

「…ごめんなさい」

「暑い。早くドアを開ける」

こうして、良太と美咲の家に、とうとうマーナが入ってきた。

「みやげだ」

マーナは、白い箱をテーブルに置いた。

「吉倉屋の和風ケーキだ。紅茶よりも、冷たい麦茶が合うそうだ」

「ええと…」

マーナは、戸惑う良太に、いらだった。

その、いらだった表情を美咲に向けると、美咲は、ひ、と言って飛びのいた。

「美咲、おみやげのケーキ、一緒に食べよう。うまいぞ」

「う…うん」

「麦茶、あるか？」

「う…うん」

「じゃ、持ってきてくれ。美咲と、こいつと、わたしの分」

「う…うん」

美咲は逃げるように台所に走っていった。

「あ…あの…」

美咲がいなくなると、恐る恐る、良太が切り出した。

「ありがとう。あの…」

「まあ、無事でよかった。それはそれとして」

わかってるだろう、とばかりに、マーナは良太を睨んだ。

「例の鍵のこと？」

「まあな」

「勝手に持ってきたのは悪いと思ってる。けど、やっぱり、その…」

マーナは襟元を広げて、こもった熱を逃がす。

良太はあわてて視線をそらす。

「別に、鍵を返せとは言わない。スぺアキーがあるからな」

え？

美咲が戻ってきた。

「…おまたせしました」

いつの間にか、そんな言い回しを覚えた美咲に、いつもなら頼が緩む良太だけけど。

今は、そんな気になれない。

「さあ、ケーキを食べようか。あれ。そうか、皿もいるな。美咲、持ってきてくれ」

マーナが棒読みでそう言って、美咲を追い払う。美咲がいなくなると、マーナは続けた。

「スぺアキーはあるがな、お前に誤解されたままなのは気分が悪い」  
「誤解？」

良太は、マーナの言葉を思い出した。

とても、酷いことをする。

そうだ、確かにそう言っていた。

「酷いことだ、ってマーナさんが言ったんじゃないか。何が誤解なんだよ」

美咲が、かちやかちやと三枚の皿を持ってくる。

これは焼き魚に使う皿なのだけけど、和風ケーキだから和風の皿を持ってきたわけではなく、たまたま手の届くところにあったのだろつ。

「ああ、フオークもだ。美咲、悪いが持ってきてくれ」

美咲は少しむくれた様子で、それでも逆らえずに台所に向かった。

「お前、アルバム持ってるか？」

もう、マーナの不意打ちには慣れた。

「アルバムっていつか…。お父さんのパソコンの中に、デジカメのデータがあるよ」

「デジ…？」

マーナは、こういうものには疎いらしい。

「ええと。うん、アルバム、あるよ」

「…そうか。ええと。それがな、いつぺんに全部消えたらどうする？」

マーナの戸惑いを見て、良太は、少し意地の悪い言い方をした。

「パソコンのハードディスクがクラッシュしても、バックアップのCD-Rがあるから大丈夫だけど。それも消えたら、っていうことだよね？」

マーナは良太を睨みつけた。生意気なガキが自分の知らないことをしゃべっていて、気に入らない。その目つきはいつも以上に鋭かったけれど、良太にとっては、マーナを悔しがらせている優越感のほうが大きかった。

「全部消えたら、そりゃ、悲しいと思うよ。大切な思い出もん」  
「それで、」

ちょうどフォークを持って戻ってきた美咲を、マーナの目は無意識に追う。

「アルバムがなくなったら、お前は美咲のことを全部忘れるか？」  
いきなり自分の名前を呼ばれて、美咲はきょとんとしている。

マーナは、ケーキを取り分けながらつぶやいた。

「あの木に集まってるのはな、中心にいるおばあさんの『想い』以外は、持ち主からはぐれてしまった、誰の物かもわからない『想い』なんだ。アルバムから剥がれて、道ばたに落ちてる写真みたいなものだ。だから、」

いちばん大きくて派手なケーキを美咲に渡しながら、マーナは、自分自身に、言った。



「思い出を消すのは、酷いことだ。でも、それで確実に一人の人が救われる。それならわたしは、人を救う方を選ぶ」

マーナと良太は、何も言わずにケーキを食べた。

美咲はどうしたらいいかわからず、二人の顔を交互に見ている。重苦しい空気に耐えきれず、泣きそうな顔をしている。

マーナはその様子を見ると、精一杯、彼女にとっては精一杯優しい声で、

「美咲、おいしいか」

と訊いた。けれど、美咲の「うん」という短い返事の後には会話が續かなかった。

何か話さなくちゃ。

良太は、今度は自分が沈黙を破った。

「マーナさんは、いつも、こういう事をしてるの？」

マーナは、さく、とイチゴにフォークを突き刺した。

「いつもじゃない。普段はちゃんと学校に通ってる。仕事するのは休みの日だけだ」

イチゴを口に放り込むと、むぐむぐと味わう。おそらくマーナは自分がケーキやイチゴを口に入れるたびに少し顔が緩んでいるのに気づいていないだろう。

「連休とか夏休みには、依頼を受けて少し遠出する。調査して、消去して、終わりだ。邪魔ものがいなければ、すぐ終わるんだが」

ぎろ、とマーナが睨む。

たじ、と良太がのけぞる。

「…一人でやってるの？」

「いままでは父の助手をしていたが、今年から一人で任されるようになった」

少しだけ得意げに見えたマーナに対しての、なんだ初心者か、という良太のつぶやきは、無視された。

「人の『想い』というのは、お前が考えているより強い。特に今回みたいに、死…この世を去ろうとしている者は、自分が残した『想

い』に引きずられ、苦しむことが多い」

「苦しんで、どうなるの…？」

マーナは、ちら、と上目遣いに良太を見た。

「べつに、どうにもならない。死んでしまえば、それでおしまいだからな。ただ…」

ケーキの最後のひとかけを、名残惜しそうに弄びながら、マーナは顔を上げた。

「すがすがしい気分で去ってほしい。そうは思わないか」

相変わらず、逆三角形の目は恐い。けれど、

良太は初めて、マーナの瞳に優しさを見たような気がした。

良太は迷った。マーナの言葉を信じて、鍵を返すべきかどうか。

もちろん、スペアキーがあるというから、鍵を返すかどうかというのは本当の問題ではない。つまり、

マーナを信じるかどうか、という、曖昧で形のない、気持ちだけの問題だ。だから難しい。簡単に答えが出る問題ではないし、答えを出したところで、割り切れるかどうかというのは別問題だから。

「美咲、クリームだらけだな」

マーナは、美咲に手を伸ばした。美咲は目を見開いて、硬直したままその指先を見ていた。が、

マーナの指が口の周りについたクリームをとってやると、美咲は急に体の力を抜いて、安心したようだった。

ああ、猫みたいだな。

良太は、ときどき道ばたで出会った野良猫を撫でることがある。

もちろん、近寄るだけで逃げてしまうものもあるけれど、たまに、触らせてくれる猫もいる。最初はおびえて警戒していた猫が、頭に触れた瞬間にこちらに敵意のないことを感じ取り、安心してくれる。その瞬間が、良太は好きだった。

「さてと」

マーナは、最後に美咲の口をティッシュで拭くと、立ち上がった。「わたしはこれで帰る」

「え、あ、ええと、ケーキ、ごちそうさま」

「今夜十時、あの空き地で待つて。鍵は、そのとき持つてきてくれ。美咲は連れてくるなよ、夜遅くに歩いたら危ないからな」

あと何時間か。それまでに答えを見つけておけ。

良太はそう言われた気がして、急に焦った。

まだ、心を決めかねている。

マーナのことは信じている。信じていいと思う。

けれど、どこかで納得しきれない。

それは理屈ではなくて、会ったこともない誰かと会ったこともないおばあさんを天秤に掛けるといふ、答えが出るはずもない問題。

良太は、マーナを玄関で見送って、ゆっくりとドアを閉める。最後の瞬間、振り返ったマーナと目があつた。

ほんの一瞬だけれど、その目が語りかけた聞こえない言葉で、決めることができた。

マーナを信じる。鍵を返す。

それで割り切れるかどうかは別問題だけれど、

鍵を返してしまえば、あとは、

僕一人の問題だから。

## 第4章 嘘（1）

### 第4章 嘘（1）

「お母さん」

夜九時半を過ぎて、良太はやつと切り出した。

「これから、ちよつと出てきていいかな…？」

母は驚いた。

「友達と、月の観察をしようって約束してたんだ」

母には、もちろん、それが嘘だとすぐにわかった。けれど、

良太も、嘘がばれていることを知りながら、嘘をついている。つまり、

理由は聞かないで。

そう言っている。母はもちろん良太が何をしに行くのか心配だったけれど、良太を信じようという父との約束を守ることにした。そう、この子は、悪いことをする子じゃない。親ばかりではなくて、心から、そう思う。

「…あまり遅くならないようにね」

母は、それだけ言っていると、家事に戻った。けれどその手に持ったスポンジは、同じ皿をいつまでもこすっている。

ごみ箱に入っていたケーキ屋の箱。良太がお小遣いで買ってくるとは思えないから、昼間、誰かが訪ねてきたのだろう。大人だろうか？ どうして子供だけの留守中に大人が訪ねてくるのだろうか？

どうして良太はそのことを黙っているのだろうか？ そして、

ゆうべ、良太の枕元にあった、見覚えのない、鍵。

子供が他愛もないものを宝物のように大事にすることはよくある。とはいえ、良太がそんなことをするとは、あまり思えない。

考え事をしているうちに、母の手から皿が滑り落ちた。洗いかけ

の湯のみに当たって、どちらも欠けてしまった。

かちやりかちやりと、破片を片付ける切なそうな音が聞こえる。

お母さん、ごめん。

大丈夫、行って、鍵を返して、帰ってくる。それだけだから。

父は寝転がってテレビを見ていて、良太を気にしているそぶりもない。

美咲はもう寝てしまっている。

良太はなるべく音を立てないようにドアを開け、家を出た。

こんな遅くに一人で外に出たのは、初めてだった。

夜だというのに、蝉がじいじいと鳴き続けている。まわりが静かだから、昼間よりもうるさく感じるくらいに。昔は、蝉は昼間しか鳴かなかつたらしいけれど、今では朝でも夜でも鳴いているのがある。たりまえだ。

あの家の門の裏、この茂みの陰、道ばたに停められた車の運転席。あちこちに何か隠れていそうで、良太の足は自然に速まった。

なんでこんな夜遅くに待ってるなんて言うんだ。

良太は、なるべく怖いことを考えないように、怪獣の木がある空き地に向かった。街灯に照らされて夜の道を歩くのは心細いけれど、この先に待っていてくれる人がいると思うと、それがたとえ般若でも悪魔でも、心強い。

自販機に照らされながら、シャッターの降りている酒屋を通り過ぎる。自分の影に、すい、と追い越されてどきりとする。たばこ屋の先の分かれ道を少し下りながら左に進んで、

あの緩く曲がった道の先に、空き地がある。

もう、迷いはない。

空き地に行つて、鍵を返す。そしたら帰る。それでおしまい。家に戻つて、お風呂に入つて、寝る。それでおしまい。

空き地に着くと、マーナがいた。木に巻き付けた電線を引っ張つ

て、たるみを直している。約束の時間までまだ間があるせいか、マ  
ーナは良太に気づいていないようだ。

マーナは、真剣な顔つきで作業を続けている。

あたりは月の光に青白く照らされていて、すべてが色を失っている  
ように見える。けれど、紺色の空気の中で、草木は確かに鮮やかな  
緑色の葉を揺らしている。

一段と鮮やかに見えるのは、マーナの黄色いヘルメット。

月に照らされているマーナは、昼間よりも、きれいに見えた。

ヘルメットで、目が影になって見えないからだ。

良太はそう納得しようとしたけれど、本心では、そうではないこ  
とがわかっていた。

何となく声を掛けづらく所在なげに突っ立っていると、いつ気づ  
いたのか、マーナが口を開いた。ただし、手は止めず、良太に背中  
を向けたままだ。

「ゆうべ、お前がめちゃくちやに引っ張ったから、電線があちこち  
に引っかかって…。外すのが大変だった」

「う…、ごめんなさい」

「枝も何本か折れてしまった。いちおう継いでおいたが…、付くか  
どうか」

「…ごめんなさい」

半分は、木に対して謝った。

うなだれている良太に、マーナは汗を拭きながら右手を差し出し  
た。

「じゃ、鍵を返してくれ。試運転しておきたくて、待ってたんだ」

「スペアキーがあるんでしょ？」

良太はポケットから出した鍵をマーナに返した。

「そんなものはない。鍵はこれ一本だ」

「…騙したんだ？」

責めるような良太の口調に、マーナはさらりと答える。

「鍵を返さなきゃ、って来てもらっても嬉しくない。わたしの言う

ことに納得して、それで来てもらえれば……」

「……れば？」

「まあ、その。嬉しい」

マーナは発電機を始動しながら、ぶっきらぼうに言い放った。けれど、だだだだ、という発電機のエンジン音に、その言葉はかき消される。

「ん……？」

燃料計を見ると、ガソリンが残り少ない。そういえば、とマーナは思い出した。

昨日、ガソリンを買いに行く途中で、泣いている美咲を見つけたんだった。

良太とけんかして、いちど家に戻ったけれど、補充しておくのを忘れていた。それで、少し遠かったけれど、給油すればティッシュを五箱もくれるという店まで歩くつもりだった。その途中で美咲を見つけて、手を繋いでケーキ屋に寄って、良太の家へ連れて行ってガソリンの携行缶は、ケーキ屋の前に置いてきてしまった。

まさか、ガソリンの缶をぶら下げてケーキ屋に入るわけにもいかないしな。

近くの店で済ませていたら美咲は見つからなかったかもしれないから、ガソリンと引き換えに美咲を見つけたと思えば、幸運だったと言えるだろう。

操作盤に鍵を挿して右にひねると、いくつかのランプが灯る。続いて操作盤のスイッチを入れると、木に巻き付いた電線のあちこちから、バチバチと激しい火花が飛んだ。

「うわっ」

良太は思わず身を屈めた。

「大丈夫だ。……通電ヨシ、と」

スイッチを切り、鍵を抜くと、マーナは再び電線のチェックを始めた。

鍵は返した。もう、家に帰っていいんだろうけれど。

「マーナさん、」

「んー？」

鍵さえ返してもらえれば用はない、とでも言いたげに、マーナは作業を続けている。

「こないだは、本当にごめんなさい。次の日、すぐに謝ろうと思っただけ」

「しつこいな。わたしはもう気にしてない」

「でも、あのあと何日かいなかったでしょ？ よっぱど怒ってるんだと思っ」

やっと電線から手を離し、マーナは月を見上げて目を細めた。

暗い手元に比べれば、今夜の月は眩しいくらいに明るい。小さな雲が二つ三つ浮いているけれど、それは月を遠巻きにしている決して重なるうとはしない。じっと見つめて初めてわかるくらいに、雲はじわりと北東に向かって流れている。

「天気が悪かったからな。いったん家に帰っていた。電気を使うから、少しでも雨が降りそうなら仕事はできないんだ。それに」

視線を落とすと、雑草に月の残像が重なる。草はゆらゆらと月を撫で、すぐに月の姿を拭き消してしまう。マーナは、もう一度月を見上げて、父から聞いた言葉を思い出す。

せつかくの旅立ちだ、きれいな月夜に見送ってやろうじゃねえか。

「……いや、なんでもない。ただ消えるだけ、だからな」

マーナの言葉の意味が、良太にはよくわからなかった。けれど、目をそらすマーナに、あらためて訊く気にはなれなかった。

「僕は、このままここにいていいの？」

風の気まぐれで、発電機の排気ガスが良太を包む。思わず口を覆って、けれど良太はマーナの答えを待ってそこを動かない。

マーナは何も言わずに作業に戻ってから、小さく「ああ」と答えた。

やがて全てのチェックが終わると、マーナは木から離れて操作盤



の前に立った。ヘルメットの顎ひもを締め、目つきが鋭くなる。良太は緊張感に突き飛ばされるように、小走りに数歩下がった。

蝉たちが、一匹また一匹と気配に押されて鳴きやむ。今のうちにとぬるく湿った風がそそくさと通り過ぎる。

「さて、始めようか。危ないから、そこから動くなよ」

マーナはそう言つと、再び鍵を挿して右にひねった。

「アルファ流、昇圧」

主電源を入れ、数回の火花が収まると、マーナはそう言つて操作盤の一番大きなダイヤルをゆっくりと右にひねる。それに従つて、怪獣の木全体がぼうつと青白く光り出す。月明かりだけに晒されていた空き地は明るく照らされて、良太とマーナの影が長く伸びる。

木の光は瞬くようになるととき暗くなり、それでも少しずつ明るさを増す。徐々に瞬きの間隔が広がり、やがて光は微かに青みを帯びた涼しげな色に落ち着いた。

「第一臨界：、安定。ベータ流、昇圧」

別のダイヤルをひねると光は黄色みを帯びてくる。すでに月の光は完全に押しやられてしまい、それでもさらに木の光は強く大きくなる。ついには目を開けていられないほどの金色の光に、怪獣の木は包まれた。

きれいだ。

良太が見とれていると、

金色の光が突然、視界全体に広がった。と思うと光は一転して急速に収縮し、最後に小さな点のようになって消えた。

「第二臨界：、安定。発破充電、開始」

発破スイッチを手前に倒す。

充電計の上のランプが灯り、甲高い音が微かに響く。怪獣の木の周りには、

金色の光の球がいくつも浮いていた。

「マーナさん、これは…？」

「この一つ一つが、美咲に見えていた『想い』だ。まず、これを取り除く」

これが、

良太はふらふらと前に出る。

これが、美咲の見ていた光…？

無数の光の球が完全に木を覆い尽くし、ゆらりゆらりとうごめいている。

すべてが同じ色というわけではなく、鮮やかな金色のものもあればくすんだ銅のような光り方をしているものもある。大きさと光り方には関係がないようで、明るいもの、暗いもの、大きいもの、小さいものが入り交じっている。

この得体の知れないものがたくさん浮いていれば、美咲が怖がるのも無理はない。

マーナは操作盤の充電計をじっと見ている。充電計の針が徐々に上がってゆく。

「お前の言うとおり、この一つ一つの『想い』は大切なものだ。誰の物かわからない古い物だとはいえ、できれば…、消したくない」  
なかば独り言のように、なかば言い訳のように。

「しかし、これを取り除かなければ、おばあさんを苦しめている『想い』にたどり着けない。だから、」

針がゲージの赤い部分に達した。発破スイッチを中立位置に戻す。  
「発破充電、完了。だから、美咲に見てもらって、本当にこの木におばあさんの『想い』があるのか、確認したかった。無駄に他の『想い』を消したくないからな」

マーナは一呼吸置いて、発破スイッチに指をかけた。

「発破」

そう言ってスイッチをパチンと向こう側に倒すと、操作盤から木に向かって伸びる太い電線に、ぱりぱりぱりと火花が散り走る。

それを目で追って初めて、

マーナの視界に良太が入った。

「っておい！ 下がれ！」

え？

ぼんやりと振り返った良太の後ろで、

光の球が爆発的な勢いで八方に飛び出した。

そのうちのいくつかが、良太に向かってくる。それに気づく暇もなく、光の球は良太を突き抜けた。

「な……」

良太は光の球が通った自分の胸のあたりを押さえて、その場へたりこんだ。

「なに……？ 今の……」

「吹き飛ばした『想い』の一部だ。良太、大丈夫か」

マーナは、視線を木に向けたままだ。

「だい……じょうぶ……」

言いながら良太は、マーナの視線を追った。マーナが初めて良太の名を呼んだことには、気づかなかった。それどころではなくて、

金色の木の根本にたたずむ、金色の少女。

「なんだ、あれ……。ゆ、幽霊？」

「幽霊じゃない。人の形をした強い『想い』だ」

年は、マーナより少し上くらいか。

セーラー服の上着に、だぶだぶのズボン      もんぺ、だっけ

を履いている。

金色の少女は、左右に傾き、ゆがみ、ときおり少しにじむように、不安定だ。

マーナは、操作盤のいくつかのダイヤルを調整しながら、金色の少女に問いかけた。

「あなたは……静江さんですね。なぜ、そこにいるのですか？」

「……ってい……の………す」

金色の少女・静江は、突然の問いにとまどいながらも、簡潔に答えた。

マーナは、ダイヤルを微調整する。静江の姿が、安定した。

「待っている…、と言いましたか？ 誰を？」

「勝義さんを」

今度ははつきり聞き取れた。けれど、

かつよし？

依頼人 静江の息子夫婦や孫からの聞き取り調査では、そんな名前は出てこなかった。

けれどそれは特に珍しいことではなくて、

遂げられなかった想いだからこそ、強く残って自分自身を苦しめることが多い。勝義は、静江の家族に知られるような間柄にはなれないまま、静江の元を去ったのだろう。

参ったな、とマーナはつぶやいた。

勝義という男は、静江の夫ではない。

依頼者である家族への報告書にはどう書いたらいいか。知り得たことが真実であれ、それをその通りに告げるのが必ずしも正しいとは限らない。自分たちの母親が父親でない男のことをずっと想っていたという事実があったとすれば、その家庭が幸福であればあるほど、その絆を傷つけてしまう。

もう少し、話を聞いてみるか。

「その、勝義という人は、」

けれど、マーナのその言葉は良太に遮られた。

「昭和十九年、だったと思う。勝義さんは、戦争に行くことになって、」

知り得ない事実が、自分の記憶のように鮮明に甦る。良太は信じられない思いで続けた。

「静江さんと、約束したんだ。必ず生きて帰ってくるって、この木の下で。…マーナさん、なんで僕はこんな事を知ってるの？」

「さつき光の球を浴びただろう。その中に勝義さんものがあつたんだ。…ただ、それで誰もが『想い』を感じ取れるわけではないがな」

見える美咲に感じる良太、か。わたしにもその力があればど

れだけ楽か…。

軽い嫉妬を覚えながら、マーナは良太に続きを促す。良太はそれに応えて、思い出すままを口に出した。

「戦局はかなり悪化していて、口には出さずとも、誰もが我が国の劣勢を意識していた。それでも行かなければならなかった。そして、生きて帰らなければならなかった」

もう良太は考えることすらせず、勝手に動く口をただ時々湿らせるだけだった。

「必ず生きて帰る。そうしたら、祝言を」

僕は、静江さんと、約束したのに。

「しかし、」

マーナが後を継いだ。

「勝義さんは帰ってこなかった、と」

僕は、帰って、来なかった？ … 約束を、守れなかった？

静江は、ぐつと唇をかんだ。

「関係ありません。私は、勝義さんを待つと約束したんです。たとえ、」

胸の前で握りしめた小さな手、震える口もと。そして潤んではいるけれど、

まっすぐに、前を見つめる、瞳。

「たとえ、彼が戦死したと聞かされても」  
そんな。

良太には、理不尽なことを言う静江が信じられなかった。  
待っている？ 死んだ人を？ 何十年も、こんな木の下で…？

帰るはずのない俺を、待っていてくれた…。

マーナが、感情のこもらない声で告げる。

「もう待っていても仕方がない。今、楽にしてあげます」

操作盤に指をかけた瞬間、

「ダメだ！」

突然、良太が走り出し、マーナと静江の間に立った。

電線から火花が散り、静江の姿がゆがむ。

「な…、バカ！」

良太がフィールドに入った影響を打ち消すため、マーナは操作盤を複雑に操作しながら叫んだ。

「良太、どけ！ そこにいると危険だ！」

「この人は、静江さんは、」

良太は大きく手を広げ、

「勝義さんを信じているんだ。絶対、帰ってくるって」

この想いを、消したくない。

「勝義さんと約束したことは、大切な、思い出なんだ」

そう、俺は、約束したんだ。

必ず、

帰ってくる、と。

それは、祈りに似た気持ちだったけれど、

そう約束することで、

俺は戦争の恐怖を打ち消し、

「静江を、心の支えにしようと、戦地でだけでなく、帰ってからも、

一生、静江を、心の支えにしようと」

まずい。

マーナは、良太の変化に舌打ちした。

良太は今、混乱している。自分に流れ込んだ記憶を制御できず、勝義に乗り移られたような状態になってしまっている。

良太の目が、赤く充血し、とがり始めた。戦時教育を受けている者特有の、悲壮感を強い決意と信念で打ち消そうとする目つき。

「良太」

マーナの言葉は、しかし、突然響いた幼い声にかき消された。

「お兄ちゃん！」

美咲？ なぜここに？

## 第4章 嘘（2）

### 第4章 嘘（2）

美咲は良太の姿をした勝義に駆け寄る。

「お兄ちゃん！」

「美咲！ だめだ、止まれ！」

マーナの鋭い叫びに、美咲は止まった。というより、あまりの恐ろしさに硬直してしまった。

ぎざぎざ、と美咲の首がぎこちなくマーナを向く。

マーナは、こちらもぎこちなく今までの人生で最高の微笑みを作り、「美咲、こっちへおいで」と手招きした。

美咲はその引きつった笑顔に多少怯えたけれど、お兄ちゃんのお友達だから大丈夫なはず、と一歩ずつマーナに近づいた。

早く、早く、早く。

マーナの焦りが、さらに笑顔を引きつらせる。

視界の端のほうでは、良太が静江に向かってふらりと足を踏み出している。

もし良太が静江に近づきすぎれば、木に流している電流が良太を襲う。

まずい、まずい、まずい。

早く、美咲、早く、来い！

「お……お姉ちゃん……、お顔、こわい……」

……。

な

ん

だと？

人生最高のわたしの微笑みが、こわ、怖い……？

マーナはがくりと膝をつき、うなだれた。美咲はさすがにまずいことを言ったと気づいたのか、心配そうにマーナの前にしゃがみ込んだ。

「えと…お姉ちゃん？」

「…んあ？」

「えと…えと…、いつものお姉ちゃんがいい…」

むす、とむくれた顔をあげるマーナ。それを見て、すこし怯えた様子だけれど笑顔を見せる美咲。

「美咲、お前…、まあいい、そこは危ないからこっちへ来い」

その時、激しい火花が飛んだ。木からほんの少し離れたところで、良太がうずくまっている。

「しまった！ 良太！」

静江に触れようとして、良太は電撃を受けていた。はじき飛ばされるように倒れた良太に静江は駆け寄りたい気持ちだっただろうけれど、木に束縛されているから動けない。良太は、良太の姿をした勝義は、執念で立ち上がる。

「俺は、約束したんだ。必ず静江の元に帰ると」

数十年の間に濃縮されたその思いだけに突き動かされ、良太の体は一步步に進む。静江は戸惑いを隠せない。

「良太ーっ！ 目を覚ませ！ 良太！」

マーナの呼びかけが聞こえていないのか、聞こえていても無視しているのか。良太は時々ふらつきながら静江に近づこうとする。

どうする、どうする、どうする？

電源を切るか？ いや、それでは良太は乗っ取られたままで解決にならない。だいいち、目の前から静江が消えたら、良太 勝義がどういう行動に出るかわからない。戦時中の教育を受けた勝義であれば、それこそ、何をするか。

それならば、良太を助ける方法は、  
発破。

マーナは、父から受けた指導を必死で思い出していた。



いいか、麻奈菜。もし人が『想い』を浴びてしまったら、  
そうだ、そんなことを言っていた。

その人は、暴走することがある。古い『想い』は濃いからな。  
そのぶん強い。

そう、そんなときどうすればいいのだったか。

どうしても、というときにはな。発破で気絶させるしかねえ。  
瞬間的に強い電圧をかけ、周辺の小さな『想い』を吹き飛ばす、  
発破。

出力は四十%。それ以上高いと黒こげだ。

怖い、怖い、怖い。もし失敗したら。

俺は、三十年以上この仕事してるが、人に発破かけたことは  
ねえ。だがな、  
だが？

やるときは、ためらうな。一瞬遅れば、その人を助けられ  
ねえこともある。

「うがつ！」

良太が再びはじき飛ばされた。間をおかず、マーナは発破スイッ  
チを充電側に倒す。

キイイイ、という高い音と共に、少しずつ充電計の針が進む。

出力は四十%？ いや、良太はまだ子供だ。その場合、もっと出  
力を下げる必要があったはず。三十%？ 三十五%？

高ければ黒こげ、低ければ気絶させられない。

この道三十年以上の父でさえ、経験したことのない非常事態。だ  
から、マーナはその話を真剣には聞いていなかった。

マーナの後悔を見抜いたように、

がるつ、と発電機が一瞬だけ不安定になる。

どくん、とマーナの心臓が縮む。

ガソリンが切れかかっている。発破充電にかかる時間を考えれば、  
二回目はない。一回目で成功させないと。

出力は？ どうする？ 思い出せない！

マーナは焦りの中で、きつ、と美咲を見た。

少しはマーナの顔に慣れていた美咲だったけれど、「ひゃ」と妙な声を上げて尻餅をつく。

「美咲、いくつだ」

「え」

「とし。いくつだ」

「よ…よっつ…」

「そうか。じゃあ、三十…四%だ」

マーナは発破スイッチを充電位置から中立位置に戻した。五十%近くまで進んだ充電計の針が、少しの間を置いて戻り始める。良太は再び立ち上がる。もうやめて、と静江が叫ぶ。

三十七%、三十六%、三十五%、三十四%、

今だ！

発破スイッチを発破側に倒せば、

黒こげだ。

！

一瞬のうちに、黒こげになった良太の姿が思い浮かぶ。泣き叫ぶ美咲の姿が思い浮かぶ。呆然と立ちすくむ、自分の姿が思い浮かぶ。スイッチに添えた指が、氷のように冷たく固く感じられる。

ぎり、とマーナの歯が軋む。指が、動かない。

マーナは、硬直した右手を左手でむしり取るように操作盤から離れた。

充電計は二十三%まで下がってしまっている。

発電機が不安定になる。いよいよガソリンが底をつく。

もう発破充電は無理か。たとえ充電したところで、

人間に、良太に発破をかけることは、わたしにはできない。

でも、良太を、良太を助けなければ。

何とかしないと。

その時、叫んだのは静江だった。

「勝義さん、やめて……！ やめてください、私が間違っていたのです！」

間違い？

「私は、あなたを待っているべきじゃなかった。私はあなたを失ってから、両親の言うままとはいえ結婚し、すばらしい家庭を築くことができました。幸せな人生を過ごすことができました」

これは、嘘だ。

震える声で、

「息子も、その嫁にも、かわいい孫たちにも恵まれました。だから、私は、あなたを待っているべきじゃなかった。あなたは」

絞り出すように、

「あなたは、私の人生に必要な人ではなかったのです。だから、」

静江さんは、嘘をついている。

「だから、もう、やめて……、来ないでください……」

マーナは、体が震え出すのを止められなかった。

会いたいという気持ちだけを深く濃く煮詰めながら、

何十年もこの木の下で人を待ち続け、どうして、

どうして、

待っているべきではなかったなどと、

必要な人ではなかったなどと、

本心で言えるだろうか？

静江さんは、だから、嘘をついている。

信じるのが『想い』の存在そのものだから、『想い』は嘘をつけないはず。

それでも、嘘をつこうとするのは、

おそらく自分のひ孫と同じくらいの年のこの少年を、  
守るために。

なんという……、

繊細で、しかし強く太い人。

自分の数十年の存在を否定してまでも、少年を助けようとする心。

けれど、

勝義の煮詰まった想いは、良太の足を確実に静江に向けて進める。

「うるさい…、俺は生きて帰ると約束した、だから、静江、俺は」

「勝義さん、やめてください！ もう来ないで！」

良太の体を、三度目の電撃が襲った。

「お兄ちゃん！」

電撃にはじき飛ばされる良太に、美咲が駆け寄る。怖いけど、怖いけど。

「美咲っ！ 待て美咲！」

マーナの制止を、しかし今度は聞こうとしない。

電線のあちこちから火花が飛び、静江の姿がゆがむ。

マーナは美咲を追おうとした。しかし、さらに自分までもがフィールドに入ってしまうと、美咲も、良太も、自分も、それから静江も、危険だ。

「くっ！」

マーナは、操作盤に戻ってダイヤルを調整した。しかし、どんなに調整しても静江の姿は安定しない。子供とはいえ、人間二人の影響はとてつもなく大きく、不安定だ。美咲が一歩進むたびに木を囲む電線から火花が飛び散る。操作盤の中でも何かが弾ける音が響き、マーナの鼻を焦げ臭い煙が刺激する。

周囲の火花に怯えながら一歩ずつ近づく美咲を、良太は睨みつけた。

「なんだお前は！ 来るな！ 邪魔をするな！」

美咲はそれでも、良太に近づく。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

小さな手を良太のTシャツに伸ばし、裾をつかんだ。

「お兄ちゃん、痛くない？ 痛くない？」

「うるさいっ！」

良太が、拳を高く振り上げる。  
美咲は良太の拳を見あげる。  
拳が、強く振り下ろされる。  
しかし美咲は、  
良太の拳が自分を襲うとは、  
ひとかけらも、  
思っていない。  
まさに、その拳が、  
自分に向かって、振り下ろされているというのに。

風圧で、美咲の髪が、ふわ、と揺れる。  
拳は美咲の頭のすぐ上で止まっている。  
美咲はまるでそうなることを知っていたように、  
良太の拳に手を添え、ほほえんだ。  
拳を解いた良太の手のひらが、  
美咲のほほを、  
優しく、柔らかく、  
包み込む。

「美咲……！」  
正気に戻った良太は、美咲を抱きしめた。  
「お兄ちゃん？ どうしたの？ どうしたの？」

二人が動きを止めたおかげで、少しずつ静江の姿が安定する。  
静江は何かを言いたげだったけれど、自分の姿が安定するのを待  
って、  
小さな声で、  
「ありがとう」  
と、つぶやいた。

「良太さん、ありがとう。おかげで、勝義さんの気持ちがよくわかりました。あの人は本当に正直で…、きっと私との約束を守れなかったことが、よほど辛かったのでしょうね」

静江は、自分に向いた良太の目を、じっと見つめて言った。

「私はやはり、間違っていないませんでした。待っていてよかった。…  
こうして、あなた方に会えたから」

静江の気持ちが固まったことを知ると、マーナは美咲を呼んだ。

「美咲、良太を連れて、こっちにおいで」

呆然と静江を見ている良太を、美咲が、驚くほど強い力で引っ張ってくる。

「お姉ちゃん、来たよ」

「うん、ありがとう」

ダイヤルを調整しながら、マーナは礼を言った。

逆三角形の目を、美咲は、もう怖がらなかった。

「静江さん、これからあなたを、」

「はい。覚悟はできています。もう、消えてしまっても後悔はありません」

マーナは、一瞬の間をおいて、かぶりを振った。

「それは違う。消えるんじゃない」

「え？」

マーナは、

深く息を吸い込み、少し大きい声で言った。

「あなたは、この木の束縛から、解放されるんです。勝義さんは、向こうで待っています。これから、あなたがこの木から離れて、そこに行けるようになります」

静江は、うつむき加減でほえんだ。ほんとうに幸せそうな、笑顔だった。

「ありがとう」

静江がそういうと、マーナは、スイッチを一つ切り替え、小さなダイヤルを回した。

「第三臨界まで、ベータ変流、昇圧……」

発電機が息をつく間隔が短くなる。一瞬、電圧が降下する。

静江と木の光がいつそう強くなり、赤みを帯びる。

さらにダイヤルを回すと、耳鳴りのような音が高まる。

静江が少しつらそうに、顔をしかめる。けれどその表情も、赤から白に変わりつつある光に埋もれ、ぼんやりとした輪郭しか見えなくなってしまう。ふちだけを赤く残して全体が白くなると、マーナはダイヤルから手を離れた。

「第三臨界、安定。アルファ流、ベータ変流、異常なし。消……いや、解放」

中央のボタンを押すと、  
パシッ、

という乾いた響きを残して、静江の姿が消えた。

マーナはゆっくりとダイヤルを戻す。それにつれて木の光も青く弱くなっていった。

ふう、と大きく息を吐き、

「……解放、完了」

マーナは、操作盤のメインスイッチを切り、ヘルメットを置いた。息をつきながらも最後の力を振り絞っていた発電機は、ほんのしばらく足掻いたあとに止まった。

月明かりは、木の光に慣れた良太たちの目には暗すぎる。光も音もなく、排気ガスの匂いだけが、あたりに漂う。

そうして訪れた静寂と闇の中、マーナはずっと後ろから見ていた良太たちに、振り向かずに行った。

「わたしは、嘘をついた。わたしは、この世に想いが残ることは知っている。けれど、あの世があるかどうかなんて、知らない」  
マーナの声が、だんだん小さくなる。

「わたしは、嘘をついた。静江さんに、気休めの嘘を」  
すっかり落ち着いた良太は、わざと明るい声で言った。

「嘘じゃないと思うよ」

「え？」

「僕は、信じてる。きっと静江さんは天国に行って、そしたら勝義さんと会えると思うよ。だから」

良太は、ハンカチを差し出して言った。

「だから、泣かないで」



## 終章 もう一度、約束のはじまり

### 終章 もう一度、約束のはじまり

次の日、良太と美咲は河川敷に向かっていた。

「お兄ちゃん、川に行ったら危ないよ、叱られるよ」

「大丈夫、でもお母さんには内緒だよ。美咲も、お姉ちゃんにバイバイしたいだろ？」

美咲は小さく頷いてしばらく黙っていたけれど、ふいに顔を上げた。

「お姉ちゃん、いなくなっちゃうの？」

答えを聞くのが怖い。そんな表情に、良太はすぐには答えられなかった。

けれど、少なくともマーナのことは、美咲との間に嘘や隠し事はしたくなかった。

「…たぶんね」

ゆうべ、家に帰って玄関を開けると、両親が飛び出してきた。最初に驚いたのは寝ていると思っていた美咲が良太と一緒に帰ってきたことで、これには良太もあたふたと言いつくすしかなかった。連れて行ったのではなく、気が付いたら勝手についてきていたということを納得してもらうのが大変だった。

その後は父も母も心配そうな顔をしていたけれど、「月は見えたか？」と尋ねる父に良太が大きく頷くと、それ以上何も聞かれることはなかった。

もっとも、良太が黙っていても、美咲が今見てきたことを身振り手振りを交えながら得意げに話してしまった。それはかなり正確で、

良太が感心するほどの臨場感溢れる熱演だったけれど、父と母は顔を見合わせて苦笑いをするばかりだった。

そうだよな。

僕だって、自分がその場にいないければ、こんな出来事は信じられないだろう。

お父さんやお母さんにいくら美咲が熱弁をふるっても、それはただのおとぎ話にしか聞こえない。想像力が豊かな子だな、と感心して頬を緩ませるのがいいところだ。

それにしても。

美咲がこんなに詳しく覚えていてくれたのは、とてもうれしい。マーナさんとのことは、いつまでも僕と美咲だけの秘密にするだろう。この先、幼い美咲がどこまで覚えているかはわからない。でも、いつか二人で語り合いたい。それまで、

大切に、そつとしまっておきたい。

ゆうべは、そんなことを考えながら、なかなか寝付けなかった。

今日も朝から暑い。神社までの道は茂る木々に覆われていて少し涼しいけれど、そのかわり蝉たちが一斉に鳴いてうるさいほどの音のアーチを作っていた。

神社の脇を抜けると、木々が途切れて視界が開けた。再び強い日差しに襲われて、良太は思わず手をかざす。美咲は「しがいせんだ！」と言つて良太の陰に隠れる。

ずっと向こう、土手の上を見ると、白い軽トラックが一台停まっていた。マーナを迎えに来た車だ。

荷台に荷物を積み込んでいるマーナが見えたので、良太は呼んでみた。

「マーナさーん」

その瞬間、マーナはものすごい勢いで駆け寄ってきた。

「大声で呼ぶな！ 恥ずかしいだろう、バカっ！」

「あれは、お父さんの車？」

「…うん」

目をそらし、なぜかふてくされたように答えるマーナの気持ちは、まだ良太にはわからなかった。父親を見られるのがなんとなく恥ずかしいのは、もう少し先の話だ。

「お前たち、見送りにでも来てくれたのか？」

「うん。それから、謝ろうと思って。仕事の邪魔して、ごめんなさい」

「…まあ、いい。こっちこそ、危ない目に遭わせてしまったしな」

マーナは遠くを見るふりをして、横を向いた。

「それで、あの…、おばあさんは？」

「今朝、会ってきた。まあ、ほとんど眠ったままんだけどな、寝顔が少し安らかになった、と家族の方が言ってくれた」

「良かった。…僕は、少しくらい役に立てたのかな」

マーナは何も答えなかった。かわりに、しゃがみ込んで、美咲に話しかけた。

「美咲、元気だな」

「お姉ちゃん、今度はいつ来るの？」

「んー、わからない。でも、きっとまた会える」

良太は安心した。マーナさんは、嘘はつかない。きっと、本当に会いに来てくれるだろう。

車の方から、マーナを呼ぶ声がした。

「もう行かないと。じゃあな」

「うん、じゃあ」

「お姉ちゃん、バイバイ」

マーナは走って戻っていった。父親が白い歯を見せて何かを言っている。どうやら、マーナをからかっているらしい。マーナは父親の背中を叩くと、車に飛び乗って乱暴にドアを閉めた。がっはっは、と父親の豪快な笑い声が聞こえた。

結局マーナは、一度も良太に目を合わせようとしなかった。たぶ

ん、ゆうべ泣き顔を見られたことが恥ずかしかったんだろう。その気持ちにはよくわかるけれど、このまま別れてしまふのは寂しすぎる気がした。だから、

最後に、ちょっと意地悪しておこうかな。

良太は、車が走り出すと、いちにのさん、で美咲と一緒に叫んだ。  
「マーナさーん、バイバーイ！」

助手席の窓から拳を振り上げるマーナがとても嬉しそうに見えたのは、きっと気のせいではないだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2908f/>

---

月夜のマーナ

2010年10月8日15時50分発行